ハンドボール「第47号目次」

昭和42年10月号

（注）時評と思いつくままは本号休載

表紙写真　日独国際親善ハンドボール第2戦・三菱鉛筆—西ドイツ
三菱鉛筆はシャープな動きで西ドイツを破り国内における女子の国際試合で記念すべき〝初勝利〟を飾った（9月10日・横浜文化体育館で）

私のことば

底辺拡大の積極化を

関東実業団連盟理事長
平出　一

高校時代に親しんだハンドボールを離れて十数年、社内有志によるチーム結成と同時に球界の仲間入りをして感じる事は、当時と比較し驚くべき普及発展ぶりである。何事も無から有をなし、それを軌道に乗せる事には大変な努力と犠牲が必要な事は申すまでもないが、その意味で日本協会を始め各ブロック、部門の指導者には心から敬意を表する次第である。球界の事情にあまり精通してない者が、多くを語る事は出来ないが、協会の重要方針である底辺の拡大普及発展について私なりの考を述べてみたい。世情が安定し、個々の生活、人心が安定している現在、一般のスポーツに対する関心はますます高まるものと思う、現に東京オリンピック開催を契機にブームを呼んでいる競技があり、我々は羨望を禁じ得ないが、それらは謙虚に考えれば、ブームを作るべき数々の要素と、競技人口の層の厚さがあった事は否定出来ない。競技内容からして、これ等に優るとも劣らないハンドボールを考る時、一般の関心と認識を得るには五年後のミュンヘンオリンピック参加を目標に、ナショナルチームをより強化し、世界の強豪と対等のゲームが戦える様にする事も一方法であろう。又日本リーグを結成し、全国各地に高度なゲームを披露し、普及の遅れている地方の競技人口の増加、技術の向上に役立せる事も必要ではないか。これと併せより重要なのは、ハンドボールを学生時代だけのスポーツに終らせない事である。近年の実業団チームの増加は、大変喜ばしい現象だが、他競技に比較すれば、わずかな数でしかない。この辺にもっともっと力を傾注すべき要因がある様に思う。学業ときびしいハンドボールを立派に両立させ得た者ならば、社会人としての人間性を養う意味でも出来るだけ競技は続けて欲しいものだ。競技年令を拡げると同時に、これに総属するハンドボールが職場を通じ、社会生活を通じて形成されている人間関係を基に、未知の人達への認識を深める事は、競技人口の増加方針と共に必要不可欠な事ではないだろうか。OBを主体に充実した活動をしているクラブチームも多くなっているが、層を厚くする意味でも既存のクラブチームに属さないハンドボールの為のクラブチームを作る事は、実業団チームの育成と同様、大切な事だと思う。各地方協会が音頭を取り、選手の数に合せたクラブチームを作って、気軽に競技を楽しむ機会を持ってやる事は決して無理ではないと思う。地道な動きこそ、明日えの飛躍に必要であり、前述した未知の人達えの認識を深める意味でも、即実行したい一つである。これ等は協会の方針として云い古された事かも知れぬが、今までに我々末端に形とし、動きとして感じられなかった事は大変遺憾である。協会の人事も一新された現在、意志の疎通のない、きめこまかな運営方針を期待してやまない。

日独国際親善東日本シリーズ観戦記

●男子　第1戦～第7戦
●女子　第1戦～第5戦

7入制一本化後ヨーロッパから初めて迎えるナショナルチーム・西ドイツ選抜軍男女一行は9月7日午後6時50分羽田着のオランダ航空機で元気に来日した。

ホルスト・ザッツ団長以下役員4人、男女選手それぞれ14人の総勢32人。男子はダークブルーのブレザーコートにグレーのズボン。女子はエンヂ色のスーツにクリームイエローのスカートといかにもスポーツマンらしい軽快な装いだった。

一行は、翌8日さっそく東京体育館で一時間の初練習を行い、9日東京体育館での第1戦（男・全芝浦工大、女・大崎電気）を皮切りに盛岡、仙台、名古屋、津、京都、大阪、広島、熊本などで日本チームと男子13戦、女子11戦をまじえた。

西ドイツ球界は8月末日まで11人制をふくむアウトドアシーズンで来日チームもインドアに備えての練習期間が少く、このため日本での前半戦は男女とも本領を発揮できなかったが、日本の気候になれチームコンディションが整えられるにしたがい、世界のトップチームらしい華麗なチームプレーを見せ各会場に集った多くの観衆をたんのうさせた。

一方、日本側各チームは夏の〃全日本シーズン〃から秋のシーズン開幕を前に絶好調で対戦。世界の強豪に互角以上の試合展開を示すことができたのはレベル向上を裏づけるもので大きな収獲であった。西ドイツ選抜軍は9月29日午後1時30分羽田から帰国した。

本誌では、このシリーズの全ぼうを2回に分けて全国のファンにお伝えするが、今月号は第1戦から東日本各地の前半戦（男子第1戦～第7戦、女子第1戦～第5戦）を集めた。

第1戦　全芝浦工大速攻で快勝

鋭い出足に西独追いつけず完敗

日独対抗男子第1戦は9月9日午後4時40分から東京体育館で全芝浦工大が対戦。主審・佐野和夫（東京教大出）、副審・松本重雄（東京教大出）、岡村昭二（東京教大出）＝観衆約七千

全芝工大　26（11－9／15－10）19　西ドイツ

記者の目

観衆七千……。全芝工大はもちろん〃ご本家〃ドイツでさえも「こんな大観衆は、はじめて……」（トルカ監督）と目を丸くした。

得	【西ドイツ】		【全芝浦工大】	得
0	デュエル	GK	福本（OB）	0
0	ケッセマイヤー	GK	山村（4年）	0
0	バーテル	FP	近森（4年）	6
4	メンダッハ	FP	小林（4年）	4
1	パール	FP	近藤（OB）	7
3	ヒルマー	FP	池田（OB）	2
1	ゴルグ	FP	山田（4年）	5
1	グッシエル	FP	関根（OB）	0
5	イバース	FP	秦（3年）	0
1	クレム	FP	明石（3年）	0
0	オーネン	FP	竹内（4年）	1
19	（3）	7MT	（1）	25

この大観衆の声援を受けて、白と緑のユニホーム—全芝工大がコート狭しと走りまくった。

前半3分、近藤が長身のドイツ選手のわき下をすり抜けるようにして先取点。そして30秒後こんどは近森がジャンプからGKの足元にたたきつけるバウンド・シュートをきめた。頭一つ違う大男—ドイツは完全に機先を制され、たたらうろ。GK福本のすばやいタマ出しから15分までに近藤、近森に山田を加えた三人がこまかくそしてすばやく走って8－4とリードした。「いけそうだ」とみたスタンドはたいへんなさわぎ。全芝工大のシュートのたびにかけ声をかけ、力のこもった声援。

だが、全芝工大にいつもの悪いクセが出た。ホッと一息入れるように速攻がとまり、1－5のゾーン・デフェンスの防御も甘くなった。これをドイツが見逃すわけがない。19分－23分にかけてメンダッハを中心に4点を連取して8－8。手首だけを使ったパスと、巨体をこまめに動かすプレーに加え、スピードの十分のったミドル・シュートが同点へとこぎつけた。

しかし、全芝工大は福本のうまいリードで再びエンジン全開。24分には近藤が中央からクリーン・シュートをきめて再度リードすると、セキを切ったように連続7ゴール。5点のリードで前半を終った。

全芝工大の速攻は後半ますますさえた。セットプレーを身上にするドイツは、めまぐるしい選手交代でこの速攻をストップしようとしたが逆効果。綿密さを欠いて立ち直りのキッカケさえもつかめなかった。

「日本の速い細かい動きは近代的なハンドボールである。われわれも即刻マネをしなければ……」トルカ・ドイツ監督は試合後深刻な表情でいっていたが、全芝工大の速攻は〃すばらしい〃の一語に尽きた。とくにGK福本の好リードは目をみはらせた。ここ数年、各種大会をみるたびに痛感したGKを加えた七人のプレーヤーが一体になった速攻が、ようやく実現したような気がした。とにかくはじめて味わった胸のすくような好ゲームだった。（**大国拓哉・読売新聞運動部**）

技術評

今シリーズ中、日本側で勝利が期待出来るとすれば、諸戦の全芝浦工大、二日目の全立大など4～5試合であろう。

特に全芝浦工大は中沢監督以下主力全員が欧州遠征の経験者で、「技よし、スピードよし」の好チームである。

現役に近藤、池田、関根、GK福本ら優秀若手OBを加えた全芝浦工大に対し、ドイツも第1戦とあってベストメンバー。

試合は予想通り、全芝浦工大は速攻を唯一の武器として積極的に攻め、そのペースに西ドイツを乗せた。

カギを握ると見られたディフェンスは、西ドイツは一線（0―6）、全芝浦工大は二線（2―4、1―5）。互角の立ちあがりであった。

全芝浦工大に多少の不安があるとすれば〃体格の劣勢〃で、特にディフェンス面でその差が現れるようだと、攻撃の動きで優っても苦況を招くのではないかと思われた。

その危惧が見られたのは全芝浦工大の攻撃が快調に発揮され前半15分7―3とリードしたあとである。

このままのテンポで押し切ってしまうのではないかと思うほどの元気さであったのだが、西ドイツはイバース、メンダッハが連続得点を重ね、25分は8―8と追いついた。メンダッハのつなぎとポイント、イバースのチャンスメーキングとポイント、パールのつなぎ等をうまくかみあわせ、しかもサイド、正面を縦横に使ってのローリング（ゆさぶり）はさすが世界のトップチームにふさわしかったが、全芝浦工大のディフェンス全員がこの動きにまどわされ、しかも長身・強肩のメンダッハへの〃詰め〃を忘れたのも拙かった。

サイドは、マークマン一人とGKに任せ、正面を固める鉄則だけは、いかなる場合でも守らなければいけない。

ところで、勝負の分岐点となったのはこの「8―8」のあとである。ホッと一息いれた西ドイツ、発奮した全芝浦工大。その精神的な差が以後の戦局を大きく左右したのだ。

全芝浦工大の攻撃は再び好調なペースとなり、特にサイドからの山田のシュートは〃みごと〃の一語につきる。

後半、両軍ベンチは、互いの手の内を読みとって、巧い守りと攻めを見せたのは、第1戦を飾るにふさわしい内容と云えた。

西ドイツは、旅の疲れもあって実力とは程違い試合ぶりであったが、全員がチームプレーに徹している点はみあげたものであり、学ばねばならない点でもあった。

西ドイツがベストコンディションでなかったというハンディはあるにせよ、全芝浦工大の見せた多彩な攻撃技術とスピードによる快勝は、日本ハンドボール界に大きな期待と希望を抱かせるに充分であり、その健斗を賞したい（荒川清美・日本協会理事長）

来日西独チーム名簿

▽役　員

役職	氏名	年齢	職業
団　長	H・ザッツ	(37)	税関支配人
副団長	H・ブレンデス	(36)	印刷技術者
監　督	H・トルカ	(56)	公務員 西独ナショナルチーム女子コーチ ハンブルグ・クラブ監督
助監督	H・コルデエス	(37)	商店経営 西独公認審判員

▽男子選手団

ポジション	氏名	年齢	身長	職業
GK	H・デュエル	(25)	181cm	体育教官
	H・ケッセマィアー	(27)	188	公務員
FP(主将)	M・メンダッハ	(29)	193	技師
	E・グルンワルド	(22)	185	商社員
	G・パール	(27)	180	印刷業
	L・トルカ	(25)	188	公務員
	M・ゴルグ	(27)	186	公務員
	M・グッシェル	(24)	185	公務員
	J・イバース	(24)	178	商社員
	W・クレム	(28)	190	公務員
	W・オーネェン	(29)	185	公務員
	R・バーテェル	(27)	172	公務員
	J・ヒルマー	(25)	182	商社員
	A・ハルトビィッヒ	(30)	170	技師

▽女子選手団

ポジション	氏名	年齢	身長	職業
GK(主将)	E・ホイヤー	(27)	174	秘書
	G・デェバァルド	(30)	171	簿記事務員
FP	S・ミューラー	(22)	163	簿記事務員
	C・ケーラー	(29)	166	会社員
	C・ミルター	(26)	175	設計士
	J・ネントビィッヒ	(25)	174	郵便局員
	B・ツン	(22)	162	銀行員
	M・ロイター	(28)	176	商社員
	H・バービュラ	(21)	166	設計士
	R・ケラー	(23)	162	会社員
	C・ビールカンツ	(23)	163	会社員
	U・ベッカー	(20)	162	会社員
	K・ポーリー	(26)	166	簿記事務員
	I・ヘーウィガー	(32)	163	監査員

	男子	女子
▽選手平均年令	26.7	25.1
▽FP平均身長	183cm	166.5cm

（写真は芝浦工大前半の攻撃。スピーディな攻撃と多彩なシュートは西ドイツ・トルカ監督を「近代的な攻撃法だ。われわれも是非みならいたい」と感嘆させた。）

第２戦

全立教大、〝本場〟しのぐ好プレー

西ドイツ、いいところなし

男子第２戦は11日午後７時30分から横浜文化体育館で全立教大が対戦。主審・安藤純光（法大出）副審・後藤（東京教大出）、栗城（東京教大出）＝観衆約三千五百

全立教大　24（11─6／13─5）11　西ドイツ

【全立教大】		得		得	【西ドイツ】
尾　形	（ＯＢ）	0	ＧＫ	0	ケッセマイヤー
川　口	（３年）	0	ＧＫ	0	デュエル
木　野	（４年）	4	ＦＰ	0	バーテル
北　村	（４年）	2	ＦＰ	0	メンダッハ
北　井	（３年）	0	ＦＰ	1	パール
東	（３年）	3	ＦＰ	2	ヒルマー
野　田	（３年）	6	ＦＰ	2	ゴルグ
安　達	（ＯＢ）	3	ＦＰ	0	グッシェル
小野口	（２年）	2	ＦＰ	4	イバース
江　名	（ＯＢ）	3	ＦＰ	0	オーネン
有　永	（１年）	1	ＦＰ	2	クレム
		24	（４）７ＭＴ（４）	11	

記者の目

これほどの大差をだれが予想できただろうか。走りまくる全立大の前に〝ハンドボールの祖国〟といわれた強豪西ドイツがガラガラとくずれていった。

全立大は実によく走った。ともにフォーメーションプレーを得意とするチームだけに大きなパスから機をみて切り込む試合展開に期待がもたれた。だが、第一戦の全芝工大が速攻で成功したことが、この日の全立大の〝快走〟につながっていたようだ。前半２分野田が倒れこみで先取点を奪うと、２点目も野田が右の同じ位置から決めた。ほとんどからだをフロアに平行にした野田得意のシュートだった。３点目は久々に登場の安達。中央、長身西ドイツブロックの上からみごとなシャンプ・シュート。この安達はシュートするとみせて東に好パス４点目も生みだした。この全立大の〝よさ〟を全部被露したスタートに西ドイツに完全に浮き足だった。シュートは正確を欠きパスも乱れる。15分、８─０と全立大が大差をつけるとあきらめの表情さえうかべた。

わずかにヒルマーが自陣から単身ドリブルで全立大の体当たりをかわしたプレーが〝本物の味〟をチョッピリ、匂わせていた。（武藤一彦・報知新聞運動部）

【写真は全立大得意のブロックプレー（上）と西ドイツ得点のポストプレー（下）】〔注〕第２戦の技術評は次号

第3戦

東日本選抜、後半に力負け

メンダッハ、9点をたたき出す

男子第3戦は13日午後7時20分から盛岡市・岩手県営体育館で東日本選抜軍が対戦。主審＝佐野和夫（東京教大出）副審＝佐々木茂喜、宮野修次＝観衆約二千二百

西ドイツ 23（9－12 14－9）21 東日本選抜

得	【西ドイツ】		【東日本選抜】	得
0	デュエル	GK	高橋邦（埼玉教員ク）	0
0	ケッセマイヤー	GK	上　野（東京教大）	0
9	メンダッハ	FP	増　田（岩手教員ク）	0
3	パール	FP	大　西（東京教大）	3
1	トルカ	FP	北　井（埼玉教員ク）	5
2	ゴルグ	FP	平　岡（東京教大）	6
0	グッシエル	FP	大　宮（日体大）	0
4	イバース	FP	神　谷（日体大）	2
0	クレーム	FP	樫　塚（日体大）	5
1	オーネン	FP	高橋蘭（日体大）	0
3	ヒルマー	FP	高　田（埼玉教員ク）	0
23	（3）	7MT	（0）	21

記者の目

東日本選抜は老巧な教員クの主力とイキのいい日体大、東京教大の現役選手による混成チーム。地元出身選手調なスタートだった。

西ドイソもようやく日本チームの動きになれたのか、余裕のあるプレーを見せ、特に攻撃面ではュンダッハ、パールなどが縦にかなりはげしいダッシュを見せ、シュートを決めていた。しかしながら、メンダッハが交代すると迫力を欠き、ただボールを廻し、ポストに入れてはフリースローをとられる状況が見られた。8－9でリードされていた東日本は、前半終了3分前から良く走り、樫塚の二本の速攻、速攻をフォローした神谷のシュートで、二点リードして前半を終了した。後半がはじまると、西ドイツも良く走り、メンダッハに加え、イバースなどがポストから決め、追いあげはじめた。東日本も、北井、平岡に加え、大西、樫塚らの好技によって、これに対戦したが、めぐまれた体格を活かした西ドイツのゴール前の強引な動きに次第に点差をつめられ、惜しくも逆転負けをしてしまった。

西ドイツでは9点をたたきだした一九三センチのエース・メンダッハが来日後はじめてその本領を発揮したのがひときわ光った（藤本強・本誌編集部）

〔注〕第3戦の技術評は次号

第4戦

西ドイツ前半のリード守る

遅かった全仙台の反撃

男子第4戦は14日午後5時30分から仙台市・宮城スポーツセンターで全仙台が対戦。主審H・コルデエス（西ドイツ）＝観衆約三千

西ドイツ 33（16－12 17－4）16 全仙台

記者の目

西ドイツは前日の盛岡大会で東日本選抜を破って大いに気をよくしていた。「走れば勝てる」はずの全仙台は、そのお株を西ドイツに奪われた形。しかもコートの長さは38メートル。狭いコートに慣れている西ドイツは速攻に、セットプレーに思う存分のプレーを展開した。

先制点をあげたのは西ドイツ。1分全仙台ゴール前でみせたメンダッハの見事なリターンパス、これをヒルマーがフェイントをかけて全仙台のバックスを抜き、左15度の地点からシュートしたもの。あの大きなからだでフェイントをかけ、背を丸めて突進するプレーはほめていい。2分にはメンダッハが左15度からジャンプシュートして2－0、5分にはGKデュエルのうまいパスアウトからヒルマーがノーマークで持ち込んで3－0、8分にはイバースが右サイドぎりぎりから飛び込んで4－0と西ドイツのワンサイド。

全仙台は8分20秒に赤間が中央から決めて1点を返したが、西ドイツは速攻、セットプレーで着実にポイントをあげ、15分には9－2と大きくリードした。全仙台は21分30秒に森のパスを受けた小林が右サイドぎりぎりから好打して3点目をあげたが。このとき、すでに得点は11－3。西ドイツのペースで試合が結始した。

西ドイツが19分20秒にあげた得点は好プレーといっていい。それはイバースがあげたものだが、左

得	【西ドイツ】		【全仙台】	得
0	デュエル	GK	若　生（東北大）	0
0	ケッセマイヤー	GK	斉　藤（東北学院大出）	0
3	バーテル	FP	赤　間（東北大）	3
7	メンダッハ	FP	岩　元（東北大）	2
0	パール	FP	新　田（東北学院大）	4
1	トルカ	FP	高　田（東北学院大）	0
3	グッシエル	FP	小　林（東北学院大出）	5
10	イバース	FP	森（日体大出）	1
3	オーネン	FP	高　橋（東北学院大出）	1
5	ヒルマー	FP	渋　谷（古川工出）	0
1	ハルトビッヒ	FP	片　山（東北学院大出）	0
0	ゴルグ	FP	上　島（日体大出）	0
33	（2）	7MT	（2）	16

【FPその他の出場者】▽全仙台＝鈴木（東北学院大）得0▽西ドイツ＝クレム得0

15度の地点から倒れ込み、フロアーすれすれのところでアンダーシュート。しかもスナップがきいていたので、文字通り〃矢〃のようなシュートであった。普通、日本の選手だと、もっと早くボールを放すのだが。イバースは百戦練磨の選手。ボールを完全に握り、GKの動きを十分読んでからスナップをきかしてのシュート。このプレーは大いに学ぶべきである。

後半になると、全仙台はプレーに余裕を持ち、動きもよくなった。13分までに11点を取られて28－8と20点差がついたものの、14分30秒から20分までの間に速読7点をあげた。調子の出るのがおそ

かったが、両サイドをうまく使い分けたプレーはよかった。
　この試合はH・コルデス氏が来日後、初めて主審をつとめたが、さすが本場の審判だけあって上手だった。ダブルドリブル、オーバーステップのジャッジはきびしく、観戦中の佐野和夫君（東京都協会理事長、東京教大出）は「選手の動きをよく見ている。ダブルドリブルをよくとっていた。かなりうまい」とほめていた。
　この試合で〝5分間退場〟があってびっくりした。前半16分にゴルグが主審のコルデス氏に小さな声で文句を言ったとたん、コルデス氏は〝ピッ、ピー〟とホイッスルを吹き、右手を開いて高く上げ、ゴルグに5分間退場を命じた。日本の現行ルールでは〝2分間退場〟であるのに、初めて〝5分間退場〟を目の当たりに見たわけだ（鶯尾武治・共同通信社）

技術評

　対戦してみて今回の西ドイツは負けて云うのもへんだが迫力の点では想像外だった。
　仙台はあらゆる資料、助言を入れて対戦計画を進めたが満員の雰囲気に焦り前半走れなかったことが敗因だった。後半の平常ペースにもどった時は連続6点のケースもあつただけに経験不足というより仕方ない。後半速攻というより速い速攻というより速い攻めでデフェンスポジションにつきふりむいたあたりのタイミングを狙い一線防禦前での十字クロスぎみのゆさぶりとサイドの攻撃で一線を変形させた時にチャンスをつかむことができた。一線防御といつても日本の2・4システムよりはるかに厚くリーチを生かし日本人の二人分のデフェンス範囲を果していた。完全にラインをいかれてからの攻撃は困難であった。日本のデフェンスの甘さを工夫したがポストで勝負された。サイドよりのシュートも第一戦とくらべたら数多く打つてきたがこれも45度でのブロックプレーより生じた攻撃だった。日本は失点が多いといわれているが考えるに①チャンスメーカーの次の②アシスタント的プレーヤーの位置のとり方、走る方向、そして③シューターとのコンビ、特に②のプレーヤーえのマークを見落しているように思えたしこれからビテオ参考に考察してめたい、又それが日本デフェンスのカギであり②のプレーヤーえのツメ処理により③の強烈シュートも半減させることが可能と思う。ところで仙台は西ドイツ審判だったが判定の基準に違いを感んじた。日本ではラフプレーが多発しているし、大会毎に退場、7て判定に個人差がありすぎるので統一化が急務と考た。外人が審判の場合日本の変化ある攻撃に不可次なステッププレーがオーバーステップにとられやすいので国際的に通ずる判定基準を明確にすべきだろう。
　国際ゲームに対応するには第一にデフェンスの組織強化、即ちオフェンスにばかり気をとられ徹底したデフェンスの訓練が忘れがちである。選抜チームにしても得点王の集りではいけない。アシスタント的プレーヤーの育成と評価、そして海外で通用するプレーを生かすための国内審判基準を望みたい。外国チームとの比較で身長、ハンドリンゲがよくいわれるが日本民俗として平均向上はあっても限界はあると思う。勿論大型化を期待するがその差につきコンプレックスをすてるべきだろう。それよりもどしどし国際交流を行ない外国チームになれることが必要だろう。それにしても国際試合がもつと手軽るな経費で出来るよう日本協会は対策を考えて欲しい。
　最後に最近のあらゆる種目の国際試合の中でひときわ西ドイツチームが示した規律ある態度は四千の観客の好評を博したことを加えておく。（森　恭一、全仙台主将）

第5戦　西ドイツ執念の勝ち星

全日本優勝の大崎電気敗れる

　男子第5戦は15日午後7時25分から東京体育館で大崎電気が対戦
主審・岡村昭二（東京教大出）、門審・中沢重夫（芝浦工大出）、岡前義春（日体大出）＝観衆約四千五百

西ドイツ　18（8－7、10－8）15　大崎電気

得	【西ドイツ】		【大崎】	得
0	デュエル	GK	福本	0
		GK	下里	0
0	クレム	FP	金田	1
3	メンダッハ	FP	井上	1
0	パール	FP	近藤	5
2	ゴルグ	FP	西村	3
1	グッシエル	FP	竹野	4
8	イバース	FP	片山	0
0	バーテル	FP	加藤	1
4	ヒルマー	FP		
0	トルカ	FP		
18	（2）	7MT	（2）	15

記者の目

　大崎はエース北村尚英が八月の全日本総合選手権で左手首を骨折し、この試合に出場出来なかった。これが大崎の敗因となった。部員11人のうち北村が欠場したのでは交代選手にも事欠き、最初から苦戦は予想された。しかし負けることはないだろうというのが、大方の予想ではなかったろうか。西ドイツは大崎がことしの全日本チャンピオンチームというので、前日からものすごいファイトをみせていた。
　西ドイツは大崎ゴール前で正確なパスで時間をかせぎ、大崎ディフェンスに少しでも穴があくと、ジャンプシュート、ミドルシュートをとばしていた。GK福本の好守で得点はそれほどでもなかったが、もし福本が不調だったら得点差はものと開いたことだろう。大崎は鋭くアタックしたが、一線防御を敷く長身の西ドイツ・ディフェンスにはばまれてシュートが届かない。このような経過で前半は8－7と西ドイツリード。
　後半も一進一退から21分メンダッハ、イバースとボールが渡り、イバースのポストプレーで15－13。残り時間は9分ある。勝負はまだわからない。この直後にクレムの2分間退場があり、大崎は23分に近藤のアンダーシュートで14－15とした。試合は全く予断を許さない。しかしつねにリードしている西ドイツは少しもあせらない。正確なパスをつなぐ。24分イバース、26メンダッハが決めて17－14と3点差になった時、西ドイ

ツの勝利はほぼ確定的となった。
それにしても大崎は北村の欠場が大きく響いた。この穴埋めにベテラン竹野が当たり、若い選手をよくひっ張っていた。北村がチームをリードし、竹野に思う存分打たせたかったゲームだった。（鴬尾武治・共同通信社）

技術評　西ドイツはようやく本来の調子が出て来たようで、攻防両面にスピードのあるプレーが見られた。
彼らの秀れた体格にスピードがのってくれば、いかにテクニシャンを揃えた全日本チャンピオンチームでもかわし切れない。
特に目立ったのはそのコンビネーションである。
大きな左右のパスで機をうかがい、ポストで好位置を占めたとみるやクイックパスを送り、そこからシュートへ結びつけるタイミングのよさはすばらしい。
若手のイバース、ヒルマーらが目立った動きを見せたが、これもメンダッハ、パールらベテランの好配球があったからであろう。
勝因の一つとしてGKデュエルの好技も見逃せない。来日後はじめて思い切って前に出るプレーを見せるなど彼自身も調子をあげて来たようだ。シャープな動きは世界屈指のGKといわれるにふさわしかった。
これに対して大崎電気はスコアの上では善戦だったが、内容的にはほとんどみるべきものがなく、ゴール前でも全芝工大、全立大らが成功したタテへの鋭い変化を欠き、精彩のない試合ぶりだった。
日本の気候にも慣れ、旅の疲れもとれた西ドイツは、後半はすべてのプレーに余裕がうかがわれリラックスした展開をみせたが、こうなるとやはり〝彼我の差〟がはっきり感じとれ、前2戦の白星で楽観することとの危険を警告したようなものだった。（増田一郎・日本協会常務理事、慶大監督）

第6戦　中大の動き通ぜず

リーチ活かした西独守備陣

男子第6戦は16日午後6時25分から東京体育館で中大が対戦。主審、H・コルデス（西ドイツ）、副審・中沢重夫（芝浦工大出）、松本重雄（東京教大出）＝観衆約四千

西ドイツ　20（6—4、14—8）12　中大

得	【西ドイツ】		【中大】	得
0	ケッセマイヤー	GK	竹下	0
0	デュエル	GK	望月	0
2	メンダツハ	FP	城	1
1	パール	FP	森山	5
2	ゴルグ	FP	佐野	1
3	グッシェルム	FP	植木	0
3	クレム	FP	堀切	2
4	オーネン	FP	喜田	3
1	バーテル	FP	宮崎	0
4	ヒルマー	FP	梅崎	0
0	トルカ	FP	長広	0
20	（2）	7MT	（2）	12

記者の目　竹下、ケッセマイヤー両GKの美技が再三あったにせよ、前半両チーム合はせて10点とは首をかしげさせられた。
中大は、伝統的にテクニシャンを揃えたチームカラーを持っているが、日本のゴール前の動きになれた西ドイツのディフェンスは、中大のフェイントに誘われることなく、上下から射ちこまれるシュートを長いリーチではね返した。
スピーディなゆさぶりに活路を求めていた中大も、相手をそのペースに引きずりこめなくてはどうしようもない。
前半はそれでもピッタリ食い下っていたが、後半開始後7分間に連続5失点して11—4とされ、勝利への希望をたち切られた。
西ドイツが日本チームのテンポになれ、意識的なローリング・オフェンスを多用するようになったために、試合としては盛りあがりのない凡戦の域を出なかった。
（杉山茂・NHK運動部）
〔注〕第6戦の技術評は次号

第7戦　全早大の斗志実らず

後半一気の速攻…西ドイツ

男子第7戦は17日午後4時10分から東京・早大記念会堂で全早大が対戦。主審・中沢重夫（芝浦工大出）、副審・安藤純光（法大出）佐野和夫（東京教大出）＝観衆約三千

西ドイツ　17（6—5、11—2）7　全早大

得	【西ドイツ】		【全早大】	得
0	デュエル	GK	綿貫（3年）	0
0	ケッセマイヤー	GK		
5	メンダッハ	FP	平塚（OB）	1
2	パール	FP	水口（4年）	1
0	トルカ	FP	旗野（4年）	3
1	ゴルグ	FP	三沢（OB）	1
1	グッシェル	FP	朝日（4年）	0
3	イバース	FP	小島（4年）	1
1	クレム	FP	萩原（3年）	0
2	オーネン	FP	森田（3年）	0
2	ヒルマー	FP	鈴木幸（2年）	0
17	（3）	7MT	（1）	7

技術評　全早稲田は荒々しい程の激しい速攻を身上とし、その持ち味を西独にどうみせるかが焦点だった。幕を開けてみてやはりその力を何んとか示そうと猛烈な突進をみせた。それが先取点だった。しかし長身西独チームに突進が単発であってはどうにもならぬし、突進から息つくひまな連繋する攻撃がなくては、あの厚いカベは破れないのでないかと思っていたのが、西独に反撃のキッカケを与えたと思う。前半西独ディフェンスを強行突破とGK綿貫の好守で食いついた早稲田も後半は日本チームなれして来た西独の早い帰陣に速攻を封じられた。ディフェンスも長身をうまく利して一線防禦を引き、強引に突っこむ早稲田を少々荒いあたりで寸断、攻撃の流れを横にかえていったあたり西独ペースであった。
総して早稲田は、速攻のうまく出ておる時はシュートきまらず、ミドルシュートもつまり気味で西独の余裕ある守りにききめなく、せっかく作ったシュートチャンスも自滅すると云う裏目裏目は不運欲を云えば早稲田にもう少しうまいフオローがあったらもっと別なゲーム展開となっただろう。この日の西独は日本の手のうちをよくのみこんで意識してのプレーだけに後半、余裕からみせたローリング戦法は大当りと云う他になかった。（中沢重夫・日本協会常務理事・技術部長）

西ドイツ女子、緒戦を飾る

緊張しすぎた前半の大崎電気

日独対抗女子第1戦は9月9日午後3時35分から東京体育館で大崎電気が対戦。主審・安藤純光(法大出)、副審・岡村昭二(東京教大出)、勝繁夫(立大出)=観衆男子第1戦に同じ

西独 7（4—0、3—6）6 大崎電気

記者の目　会場の東京体育館に一歩足を踏入れて驚いた。ムッとする人いきれ。なにしろあの広い観客席がいっぱいなのだ。なんと約七千人。〝ハンドボールが日本に輸入された昭和十二年以来、一番の入り〟と協会の長老の顔がほころぶ。〝大崎の選手はあがるぞ?〟真先にそう思ったのは間違いではなかった。案の定コチコチだった。どうも日本選手は国際試合になると実力を発揮できない傾向が強い。

およそ三百四十年ほど前の寛永年間に徳川幕府が鎖国政策をとり始め、ますます日本人の〝島国根性〟を助長したが、それが今日まで尾をひいているとは余り考えたくない。が、国際試合であがるのを見て、いつも日本選手には何かが欠けているように思えてならない。話がヨコ道にそれた。大崎が前半、すっかり堅くなり、それが敗戦につながったことが惜しい、といいたかったからだ。

西独女子は七つのクラブの寄合い(トルカ監督)とあって、やはり速成チームにありがちなコンビネーションのぎこちなさが目立った。半面、個人技はさすが。ミューラーが片手でボールを魔術師のように振り、幻惑された大崎防御陣に穴があくやミルター、ロイターらが柔らかい身のこなしで巧いシュートを決めた。

得	【西ドイツ】		【大崎】	得
0	ホイアー	GK	川崎	0
0	デバルト	GK		
1	ミューラー	FP	加藤	1
1	ケーラー	FP	早川	3
1	ミルター	FP	鈴木	1
1	ネントビッヒ	FP	小林	0
0	ツン	FP	宇井	1
1	ロイター	FP	木幡	0
0	ポーリイ	FP	山崎	0
0	ケラー	FP	黒川	0
2	ビールカンツ	FP	笠原	0
7	(0)	7MT	(1)	6

対照的に大崎はよく走ったが、エース早川にボールを集めるポストプレーが無策すぎて、前半14本も数えたシュートが一本も決らなかった。大崎得意のコマネズミのように走る速攻がさえたのは、堅さがとれた後半から。5—0と引離された7分と8分に早川が連続ゴール。11分には加藤も決めた。このあたり長身ぞろいの西独は、大崎の激しいゆさぶりにたじたじ。大崎は17分に7—5と猛追。18分には早川が再度の7メートルスローを得たが失敗だ。惜しい。終了30秒前、宇井が7メートルスローを成功させて一点差としたが及ばなかった。

大崎は敗れた。が、日本に〝勝てる〟という自信をもたらした善戦ぶりは大いにたたえられよう。

(渡辺邦雄・朝日新聞社運動部)

〔注〕 技術評(安藤)は10頁。

女子 第2戦

走り勝った三菱鉛筆

落合(5得点)の好プレー光る

女子第2戦は11日午後6時から横浜文化体育館で三菱鉛筆が対戦。主審・佐野和夫(東京教大出)、副審・植田(東京教大出)、松本(東京学芸大出)=観衆男子第2戦に同じ。

三菱鉛筆 11（6—5、5—4）9 西ドイツ

記者の目　小柄な三菱選手が、長身の西ドイツ陣を終始かきまわし快勝した。勝因はなんといってもその〝走り〟にある。

負けてもともとという気持ちがあったのか、それとも第1戦を見て勝つ気充分だったのか、ともかく小気味よい試合ぶりを見せた。

なかでも一進一退をつづけて5—5のあと前半終了直前、逆襲に転じようとした西ドイツのパスをインターセプトとして独走、シュートを決めた落合の好判断は、スコアを6—5と変えたばかりでなく、この試合の帰すうを決めたフ

【三菱】		得
GK	吉田	0
FP	三井田	2
FP	鈴木	0
FP	佐々木房	0
FP	落合	5
FP	佐々木洋	0
FP	江川	1
FP	蓮見	3
FP	遠藤	0
FP	阿部	0
FP	本条	0
7MT	(2)	11

【西ドイツ】		得
GK	ホイヤー	0
GK	デバルド	0
FP	ミューラー	0
FP	ケーラー	0
FP	ミルター	2
FP	ネントビッヒ	1
FP	ツン	1
FP	ロイター	3
FP	バービュラー	0
FP	ケラー	1
FP	ビールカンツ	1
FP	ベッカー	0
7MT	(1)	9

アインプレーだと思う。

この好技に余裕を得た三菱は、後半開始直後再び落合が決めて7—5。しかし西ドイツもロイターのゲットとミルターがパスとみせかけ後向きから逆手でシュートを決めるという快技で一たんは同点（7—7）に追いついた。西ドイツはこのあと8分に得た7MTをミューラーが失敗、逆に三菱は11分落合の7MTで再びペースを握り12分速攻から三井、16分落合（7MT）と加点、10—8とリードして逃げ切りへの足場を固めた。

西ドイツの卓抜した個人技はさすがに世界一流と呼ぶにふさわしいものであったが、三菱鉛筆が気力充実したチームプレーでそれを上廻る力を見せたのはたのもしい

（杉山茂・NHK運動部）

女子第1戦技術評

日本ハンドボール界が迎える初の外国女子チーム、本場ドイツの選手団はどんな技術をわれわれの前に展開してくれるだろうか、われわれハンドボール関係者は大きな期待をもって注目した。

西ドイツを迎えての女子第一戦は、先に行われた全日本総合選手権大会で第二位の大崎電気との対戦であった。

試合は第一戦ということと、ハンドボール史上初の大観衆と、その歓声と熱気に圧倒されたか、さすがの大崎電気のベテラン選手も、こちこちにかたくなり、とくに前半はパスミスとドイツのディフェンスを破ることができず、長身のドイツ選手の前からの無理なシュートが多く無得点に終った。ドイツは旅のつかれもあるのか、動きそのものこそ鋭さがなかったが、正確なパスを廻して、二分にロイターが右サイドからシュートをきめ、試合の主導権を握った。つづいて十二分、十七分、十八分と得点を重ね、もてる長身を充分に生かしてポストプレー、ロングシュートと身長のない大崎をよせつけなかった。大崎はよく走ったが、ボールがついて来ず、ただいたづらに攻めてはもどることをくり返していた。差が開くにつれて、あせりがでてエース早川も7MTをはずすなど全くいいところがなかった。

後半に入って、大崎は立ちなおり、早川も本来のプレーができるようになり、リーチのあるドイツディフェンスを切りぬけて六分、七分、十六分と得点し試合をもりあげた。五対七と大崎が追いあげたところで早川は二つめの7MTを失敗した。このあと十九分に三つめの7MTをベテラン宇井がきめ六対七と追ったが敗れた。早川の二つの7MT失投が惜まれる。それにしても前半に大きく水をあけられれのが敗因であり、前半に後半の落ち着きと切りこみがあったら、結果は逆になっていたであろう。ドイツは後半に入っても、前半同様正確なパスと長身を利してのロングシュートとポストプレイを展開したが、旅のつかれがあるせいか、大崎のスピードにはついて行けなかった。

日本における試合を重ね、気候にもなれれば、彼女らの本来のわざもスピードもでてくるものと思われるが、この試合に限っては、あまり見るべきものはなかった。今後の試合に期待したいものである（安藤純光・日本協会常務理事、審判部長）

〔注〕 第2戦の技術評は次号

女子第3戦

ミューラーが好リード

東日本選抜の健斗及ばず

女子第3戦は13日午後6時から盛岡市・岩手県営体育館で東日本選抜が対戦。主審 箱崎敬吉（東京教大出）、副審 加藤欣哉、足沢光彦＝観衆男子第3戦に同じ

西ドイツ 9（4—3 / 5—5）8 東日本選抜

記者の目

新装なった岩手県営体育館には千田県知事をはじめとして内外の多くの観客を迎え、一般観客席もほぼ満員という盛況だった。

前半は両チームとも固くなっていたのが、ミス・パスやミスシュートが多くほめられた出来ではなかった。

西ドイツはポストプレーを主体にした攻撃を見せていたが、そこに到達するまでのパスをミスしたり、カットされたりして、東日本に速攻の糸口を与えていたが、東日本はこれが生かせず、せっかくのチャンスもパスがまずかったりつまってしまったりしていた。両チームともいま一歩のところで7MTになるケースが多く、その7MTもミスることがあり、盛りあがりのないままに前半を終了した。

後半がはじまるや、ミューラーの好リードによって、まず右サイドからロイターが、ついでこれまでアンダーシュートを多く試みていたミルターが眼のさめるようなロングをジャンプシュートから決めた。ここで試合は決ったかに見えたが、東日本選抜も北口のミドル、原、隈らがカットインして得た7MTを良く生かし、追ったが、西ドイツはケーラーの右サイドからのシュート、ビールカンツ

【東日本選抜】		得
GK	明神（日体大）	0
GK	小野里（日体大）	0
FP	北口（日体大）	3
FP	川口（日体大）	2
FP	原（日体大）	2
FP	隈（日体大）	1
FP	三浦（花巻南高）	0
FP	白土（日体大）	0
FP	今井（日体大）	0
FP	熊谷（東女体大）	0
FP	中島（東女体大）	0
FP	津熊（日体大）	0
7MT	(4)	8

【西ドイツ】		得
GK	ホイヤー	0
GK	デバルト	0
FP	ミューラー	1
FP	ケラー	2
FP	ミルター	1
FP	ネントビッヒ	0
FP	ツン	0
FP	ロイター	3
FP	ビールカンツ	2
FP	バービュラ	0
FP	ベッカー	0
FP	ヘビッカー	0
7MT	(1)	9

のポスト、カットからの速攻と続き、9―7で3分前を迎えた。ここで西ドイツチームは積極的な攻撃を見せず、8の字様のローリングによってボールを廻しはじめた。この間、ミューラーがときおりドリブルインを見せるていどで攻撃の意志はほとんど見えなかった。これを東日本選抜はアタックに出、サイドアウトしたボールを得てこれをすぐに川口のミドルに結びつけたが、時遅かった。

日体大を主体に、東女体大から二人、インターハイ優勝の花巻南高から一人を入れた混成チームであったため、この三人がもう少しチームにとけこんでいたら……という場面が見られた。後半開始直後に見せた西ドイツの攻防がいつも見たいものだ。（藤本強・本誌編集部）

技術評

一点を争う好試合、選抜軍のため、まとまった練習ができず、コンビネーションがとれない。それに選手が若く国際試合の経験がないためか試合にのまれ、立ち上がりの東日本は緊張ぎみであった。

前半西ドイツの三点連取りに気遅れした東日本であったが、中盤から緊張がとれ小柄な身長をいかして縦の突っ込みと、動きの早い細いプレーで盛り返し、二本の7MTスローをものにして4―3と追い上げた。

後半、ようやく調子の出て来た東日本は、ポストプレーとサイドからのシュートで得点を許したが、川口の好リードで返すというねばりのあるプレーを見せた。

二点をリードする西ドイツは、左右のゆさぶりと八ノ字戦方でローリング。タイムアップ二分前東日本は、パスミスを拾った原が川口にパス、川口、右コーナーを決めて一点差、終了一分前、一点差を追う東日本は、西ドイツのキープ戦法にカットに出たが、およばなかった。

土壇場まで一点差を争う激しい攻防戦の展開であったが、西ドイツの初勝利をあげねばというファイトに負けた。（伊藤帆浪・旧姓山田、元レナウン工業主将）

こぼればなし

初の国際試合を迎えた盛岡市・岩手県営体育館は満員のファンを集めたが、バックスタンドには全日本高校女子優勝の花巻南高校の生徒約二百人が陣どった。

夏の優勝で、同校のハンドボール熱は急激に高まり、この〝団体鑑賞〟になったもの。

わけを聞いた西ドイツ役員たちは「すばらしい話だ。日本のハンドボールが接するたびに強くなる秘密の一つが判った」と感嘆していた。

ミューラー嬢訪問

西ドイツ男女チームの中で、もっとも注目を集めているのは、女子チームのゲームメーカーS・ミューラー選手だ。

マイボールの6割近くは彼女の左手にキープされ、そこから、まるで機械で計算されたようなパスが左右前後に送られる。しかも機を見るや、軽妙なフットワークで相手ディフエンスをかわしシュートに持ちこむ技も備えている。守りの面でも敏速な動きでカンのいいところを見せその要だ。

来日チームの〝ピカ一〟という評判もうなずけよう。

男子の試合をみながらコーラをのみほす彼女を訪ねてみた。

×……×

それまで陽気にはしゃいでいた彼女にインタビューをというと急に引きしまった顔になった。

ピンチに立った時、よくみせる顔だ。そして「私のことなら、すべて監督や役員が知っているから、そこで聞いてくれ」という。とりつくしまもない。

「あなたのプレーはスポーツライターやファンの絶讃をかっている」と伝えると、はじめて笑顔が浮かんだ。

そして、やっとこんなことを聞き出せた。

――ハンドボールは何才ごろからしているの

「九才の時……。はじめかから左ききよ」

――試合でみせる配球の妙はどこで覚えた？

「自然に身につけたとでも云おうかしら。あまり体が大きくないから（注・一六三センチ）ああいうプレーになるともいえる」

――練習量はどのくらい？

「仕事を持っているから（注・彼女は商社の簿記事務員）一週間に一度、それも二時間ぐらい。休日の試合が練習も兼ねることになる……。

もちろん、ナショナルチームに加った時は練習量はふえます」

――国際試合の経験は

「ナショナルチームのプレイヤーとしては16回。この前の世界選手権にも出ました。その他の国際試合の数はちょっと覚えていないわ」

――将来に目標を持っている？

「世界選手権には何度でも出たいしオリンピックで女子があるようならもちろんその代表になりたい。

しかし、何よりも長いことプレーをつづけていたいと思う」

――日本チームの印象は

「スピードもあるし、テクニックも申し分ない。教えられるところが沢山あった」。

――印象に残った選手はいる？

「みんなうまいわ(笑)。チームとしては、これまで（注・16日）では大崎電気がいちばん」

――体育館などについては感じたことがある？

「とても大きい。西ドイツのハンドボール専用体育館はもっと小さいのよ。

はじめのうちはその大きさになれなかったし暑くてやり切れなかった。でも沢山の観衆がいるのでやりがいがある」

――日本の印象は

「むずかしい質問だわ」

彼女はそう答えたあと「日程がきつい」と小声でいった。

話している間にも、親友のツンー選手と冗談をとばしている彼女はいかにも陽気だ。

兄二人をもつ末ッ子。そんな環境が、彼女をくったくのないスポーツウーマンにしているのかも知れない。素直な明かるい性格―彼女はきっと〝ミュンヘンの花〟になるにちがいない。

女子第4戦

大崎電気、第1戦の雪辱なる

後半元気なくした西ドイツ

女子第4戦は15日午後5時から東京体育館で大崎電気が2回目の対戦。主審・中沢重夫（芝浦工大出）、副審・岡前義春（日体大出）、佐野和夫（東京教大出）＝観衆約五千

大崎電気 12（6—6 6—5）11 西ドイツ

両者の対戦はこれで1勝1敗

記者の目

大崎電気が第一戦の雪辱を透げた。お互いに手のうちを知っているだけに、なかなか内容のある好試合を見せた。

西独は4分、ミュラーの先制点を皮切りに10分までに、4—1とリードすると切り札のロイター、攻守の要・ミュラー、ケラーの三人を引っ込めた。

だが西独は動きという点では大崎に一歩をゆずり、特に帰陣が遅く、三人の主力を抜いたのはちょっと甘く見すぎた感じ、守りがぐんと弱くなった。

大崎はすかさず速攻でその穴をついた。12分に鈴木がカットイン、15分に早川が決め5—4と迫って場内を湧かせた。

戦況不利と見た西独は、すぐ切り札ロイターにスイッチ、17分に得点、負けじと大崎も加藤が帰陣の遅いデフェンスを抜いてまた1点差、再びロイターが突込んで加点するなど、シーソゲーム。

特にロイターの登場はいかにも〝切り札〟にふさわしい名手ぶりで、17分における1分間はハンドボールのおもしろさにファンが酔った。

だが〝発祥地〟というエリート意識を誇示する西独も、ぐいぐい詰め寄る大崎にあわてはじめ、18分山崎（7MT）19分に鈴木と連んで試合を振り出しに戻した。

後半は4分、西独がロイターの7MTを含む2点でまたリードを許したが、5分以後、早川、山崎（7MT）鈴木と加点、大崎は初めてリードを奪った。

このあと9分に7MTをあたえたが。GKの川崎が好捕して反撃を断った。10分には逆に7MT専門の山崎が、うまいフェイントでGKを惑わし、この日3本目を決めて2点差に離した。

波に乗った大崎は笠原、加藤が加点したのに対し。西独はミュラー、ロイター（7MT）が必死にねばったものの、このあたりから疲れを誘い、とうとう1点差で逃げられてしまった。

この試合は西独が来日以来、一番いいプレーを見せた。ところが明暗を分けたのは7MTの出来、不出来だった。大崎は三本の7MTを全部得点したのに対し、西独は5本のうち成功は2本だけ。手痛いミスだった。というよりもそれを防いだGK川崎の好守と、欧州で名のあるGKホィアーを惑わした山崎の度胸のよさが大いにホメられよう。

西独で光ったのはミュラーのたくみな球さばきと。ロイターの強烈なシュートだった。（**佐々木長九郎・日刊スポーツ運動部**）

〔注〕 女子第4戦の技術評は次号

得	【西ドイツ】		【大崎】	得
0	ホイヤー	GK	川崎	0
0	デバルド			
4	ミューラー	FP	加藤	2
1	ケラー		早川	2
0	ミルター		鈴木	4
2	ネントビッヒ		小林	0
4	ロイター		宇井	0
0	ケーラー		木幡	0
0	ビールカンツ		笠原	1
0	ツン		黒川	0
0	ヘウイッカー		山崎	3
11	（2）	7MT	（3）	12

女子第5戦

東京重機の善戦及ばず

貫録示したGKホイヤー

女子第5戦は16日午後5時15分から東京体育館で東京重機工業が対戦。主審・松本重雄（東京教大出）、副審・岡前義春（日体大出）、勝繁夫（立大出）＝観衆界子第6戦に同じ

西ドイツ 12（7—6 5—3）9 東京重機

記者の目

西ドイツは前日の対大崎戦でポイントゲッターのミルターが両ひざ（内出血）を痛めて欠場し名キーパーのピューアーも左足首をねんざして前半ベンチにいた西ドイツはこの主力二人の欠場で戦力はやや落ちた感じがあったが、背の低い重機ディフェンスをミドルシュート、ポストプレーで押し込んでしまった。重機にとっては惜しい試合を失ったといっていい。それほど重機の出来はよかった。

前半2分西ドイツはロイターが7MTを決めて先行したが。重機は早い動きで西ドイツ防禦陣をゆさぶった。4分山本（幸）が左サイドフェイントをかけて西ドイツバックスを抜き、5分にはヘウィッカーの反則（プッシング）で7MTを得、飯田が決めて2—1と逆転した。5分30秒には山本（タマ）がシュートしたかポストに当たってはね返り、これをプッシュして3—1。8分には滝口がループレーからうまく中央を割って4—1とリードした。

9分30秒重機の滝口が強引とも思われる中央突破を試み、西ドイツバックスの二人が小さい滝口に抱きついて止めようとした。しかし滝口は二人を振りはらうようにしてシュートを放ち、5—2とリードを続けた。とこびがこの直後重機の飯田が2分間退場し、その

得	【西ドイツ】		【重機】	得
0	デバルド	GK	高野	0
0	ホイヤー			
4	ミューラー	FP	山本タ	2
0	ケーラー		畑岡	0
2	ネントビッヒ		飯田	1
0	ツン		滝口	2
4	ロイター		島田	3
1	バービュラ		金井	0
1	ビールカンツ		山本幸	1
0	ケラー		荒井	0
0	ベッカー		長谷川	0
12	（1）	7MT	（2）	9

間に西ドイツは猛反撃に移った。

西ドイツは10分から17分までの間に連続5点をあげん7—5と一気に逆転し、優位に立った、重機は17分30秒に島田のゲットで6—7と1点にして前半を終わった。

後半の西ドイツは3分30秒までにミューラーのフェイントプレー、ロイターを倒れ込み、バービュラのポストピレーで10—6と4点左にした。重機は前半に全力を集中したためか、後半になってスピードが落ち、前半のような動きはみられなかった。それでも5分30秒に島田、8分30秒に同じく同じく島田、9分30秒に山本（タマ）のジャンプシュートで9—10と1点に追い詰めた。

ここで西ドイツは、GKを交代させ、左足首を痛めているホイヤーを出してゴールを死守させた。重機は必死になって西ドイツのゴールを攻めるが、どうしても追いつけない。10分ミューラーが中央を割って11—9と2点差。西ドイツは一線防御を敷いて重機のミドルシュートを警戒した。重機の疲労は目に見えて濃くなってきた。（14分に西ドイツはトルカ監督はサイドラインまで出て指示する）。

2点差を守ろうとする西ドイツはパスの連続でボールを重機に渡さず、重機のあせりを誘った。重機は9分30秒からタイムアップまでノーゴール。西ドイツはタイムアップ寸前にロイターが7MTを決めて重機の反撃を断ち切った。重機は敗れはしたが、その善戦ぶりは賞されていい。とくに滝口、島田、山本（タマ）のプレーは印象に残った。（鶯尾武治・共同通信社）

〔注〕女子第5戦の技術評は次号

女子第6戦

旅疲れ？西ドイツ振はず

愛知紡、伝統の速攻で快勝

女子第6戦は17日午後4時30分から名古屋・愛知県体育館で愛知紡が対戦。主審・稲石三二（日体大出）観衆約五千

愛知紡 12（8—4 4—3）7 西ドイツ

得	【西ドイツ】		【愛紡】	得
0	デバルド	GK	尾崎	0
		GK	中下	0
2	ミルター	FP	小林	4
1	ケーラー	FP	前田	3
1	ネントビッヒ	FP	五十嵐	1
0	ツン	FP	小野	1
1	ロイター	FP	関口	2
1	ポーリー	FP	黒木	1
0	ヘウイッカー	FP	藤池	0
1	ビールカンツ	FP	岩崎	0
0	ミューラー	FP		
7	（0）	7MT	（0）	12

技術評

西ドイツのスローオフで試合開始。愛知紡の固いデフェンスでポスト・プレーはいかされず、ミューラーのたくみなフェイントもフオローの不足に単発に終り、一分愛知紡績7MTをとるもGKデバルドの好守にはばまれ得点とならず共にさぐりあふ。二分半愛知紡前田の得点で固さがとれはげしい攻防を展開、エキサイトした場面もみられたが、片やセットオフェンス一点張り、片や守りに徹する愛知紡としてはデフェンスを固め、ミューラーをつぶす作戦は当を得たものであろう。

以後十分までに愛知紡四点とるもドイツ単発の三点、ロイターのセット・オフェンスからのロングシュートにドイツらしさをのぞかせた。このあたりまでの攻防で勝負はついたように思う。勝因としては走力を生かして最後までコマネズミのように走りまくり横の動きに対して縦の切り込をおりまぜ、小林のミドルシュートを中心に、関口、前田、五十嵐等が予想通りに活躍し、守っては、関口、五十嵐等の自爆覚悟の守備に対して、カバーがよく、しつようにミューラーをつぶしたのがあげられる。くわうるにGK尾崎の再三再四の好シュートをはばみゴールを死守したことであろう。全般を通じてみせた、外人に対しても気おくれしないファイテング・スピリットは日頃の練習の成果であろうが、ラフプレーは厳につつしまなければいけない。ドイツとしてもミューラーのフェイントとケラーのポストでは役者不足。まだまだ暑さのため本調子ではないようだが、フェイント、ポスト・ロングシュートと速攻をみせてほしかった、総じて愛知紡の速攻の勝利である。（稲石三二・日本協会技術委員）

ミユーヘンで女子も

西ドイツチーム、ザッツ団長は来日直後の記者会見で『ミュンヘン・オリンピックのハンドボールで女子も開催されるよう努力していが見通しは明かるい』と語った。

ミルター嬢訪問

ヨーロッパでも有数のゲッターといわれるC・ミルター選手は来日チーム一の長身。その突進力と得意のうしろむきからの〝逆手シュート〟はすばらしい。彼女の目に映った日本チームは……。

×××

日本女子チームの選手は、実によく走るのでびっくりした。私たちは脚力がないので、日本の速攻には追いつけない。でも私たちは、ゴール前でセットを組み、パスを繰り返しながら相手のミスを誘い出す作戦です。日本チームが、いくら走っても気にしていません。走ってゴールインしても1点なら、セットを組んでゴールインしても1点です。出来るだけ体力を消耗させせないようにしています。

ですから、日本チームも速攻ばかりでなく、私たちのようなセットプレーを加えたら強くなると思う。

セットを組んだとき、パスミスを出さないことがたいせつですね。速攻にセットプレーがプラスされたら、日本は世界チャンピオンになれると思う。もちろん私も日本の速攻を勉強したいと思ってはいますが…。

フランスの技術研究（4）

防禦を置いたパスを充分に

訳　藤　本　強
（日本協会常務理事）

今月は先号に紹介したパスをより実戦に近い形で練習する形について触れて行く。

パスだけでなく、シュートにしろ、キャッチにしろ、あるいはドリブルにしろ、ハンドボールにおいては、ただ単にそれらを上手に出来るというだけでは、ものの役にたたない。一つ一つが巧くできても、ゲームでは、常に相手がいて、それを妨げようとしているのであり、また心も体も一つにしてプレーするチームメートがあるのであるから、一人の人間が全部の技術をマスターし、その上チームとしてもコンビのとれたものにしていかなければなれない。

これらの個人技術、チームとしてのコンビも、敵がいない時にのみ、きれいにできたのでは、実戦では、全く役に立たない。

少々巧くなくても、相手がいる時に確実にパスできる能力、相手がどんな形で当ってきても、自分が思う時に、思う所にパスできる技術を身につけておくことが必要である。

そのためには、動きながら、守備する選手を配置したパスを十分に練習しておかなければならないのは云うまでもないことだと考える。

とかく対人パス、三角パスといったものにパスの練習の重点が置かれているようであるが、これから述べるようなパスの練習形も十分な時間をかけて行なわなければならない。

もちろん、相手をおかないパスの練習も基礎の基礎として重点的に練習しなければならないのは云うまでもないことだが、相手を置き、それをどうかわしてパスをするか、どんな時にどの形のパスを使えば、マークを外せるかも、選手自身が十分納得できるような、それだけでなく体で覚えこむことができるような形の練習がなされることが望ましい。

このあとに紹介していくのは、そのうちのごく僅かの例にすぎない。

各チームとも他の色々な体形を使って、相手を置いたパス練習をしていることであろうから、その長所は十二分に生かして、ここに紹介するものの中で取り入れられるものがあれば、とり入れて、より合理的なパスの練習が行なわれるように望むものである。

☆　☆　☆

練習例1（図①参照）

AからCにパスをする。このパスはAとCの間に入っているBをかわして行なう。

Bの位置はAから、ちょうど腕の長さに相当するだけ離れた地点にいることにする。BはAをアタックして、パスをさせないようにする。

このような体制の場合には、普通には弓なりにBを越えるパスをするか、Bの下をねらったバウンドパスをするかをする。

上下についてのフェイントをこの練習を通じて十分にマスターすること。それとともに体を左右に動かし、左右の手を片手ずつ使い行なう練習も必要となる。

この際、フックパスを使うことはさけたほうがよい。というのはフックパスはこのような状況の際に乱用すべきパスではないからである。

Cにパスがわたった場合には、BはCをマークしにいくことになる。このような練習方法をとることによって、Bの守備技術も高めることができる。

パスをミスしたAまたはCはBに代って、守備に入ることにして次々に代り、練習をつづけ、パスの技術を高めていく。

練習例②（図②参照）

練習例①をより高度にしたものであり、練習例①とは、守備選手の位置が種々に変化し、更にパスをする相手が3人に増え、パスする相手を選択する眼を養う練習にもなってくる。

3〜4メートルの円の上に6人の選手が並び、その中央に守備をする選手1人が入る練習形をとっている。

この場合、あらゆるパスを使う

練習をしなければならない。スピードにより、フェイントにより、上下、左右とパスを出すところをかえ、ディフェンスをかわし、パスをする練習をする。

この練習例の時もフックパスは使わない。理由は練習例①の所で述べたとおりである。

また隣の選手には、決してパスしてはならない。

守備をする選手は常に中央にいて、パスをする者をよく見、ボールの動きを忠実に追い、冷静な判断でカットするように心がける。

練習例①では、守備に入ったものは、パスをさせないようにマークするのを第一に心掛ける。

練習例②では、守備をする者はカットすることを主に考えるようにする。

パスする者はそれぞれをかわすように、基礎技術で充分に練習をつんだあらゆるパス技術を駆使して、自己の技術を高めなければならない。

練習形③

これは練習形①と練習形②を総合したものになっている。つまりマークした守備者をはずし、パスされる相手をマークしている守備者をもフェイントではずして、思う相手にパスをするというより実戦的な練習体形となっている。

6人の選手が②と同様に円の上に位置する。二人の守備側の選手がパスをカットするように、またパスを送れないようにするように働く。この場合にも、あらゆるパスが行われなければならない。そして、選手が自分自身でどのような状況の時に、どんな種類のパスをしたらよいかを悟るためにも十二分に練習をつむことが肝要となろう。

練習例④（図③参照）

4人の選手が1人の選手Aの前に位置している。

この練習は二つのボールを使うことがその特色である。二つのボールを使って養う技術はまず何といっても眼である。二つのものが同時に見られるようになっていることはハンドボールの選手にとって必須のことである。何度も前に出て来てはいるが、いわゆる〃魚眼レンズ〃のような眼をもつ選手を養うことが主目的である。

いくら足が早く、肩が強い選手であっても、〃魚眼レンズ〃的な眼をもっていない選手は片輪でしかない。こういった選手はしばしば大事な場面でブレーキになることが多い。この〃魚眼レンズ〃のような眼を持つことは、攻撃する際にも、守る際にもぜひとも必要である。攻撃の時には、敵の位置を完全に知り、どこから攻撃をすべきか、その時味方の全選手はどこに位置しているか、ボールはどこにあるかをこの眼を使い、知り正確な判断を瞬間的につけなくてはならない。守備の時には、敵の位置、味方の守備の乱れ、敵の攻撃目標、ボールの動き、これらをすべて頭の中に入れ、よりよい位置をとるために、この眼は必要になる。

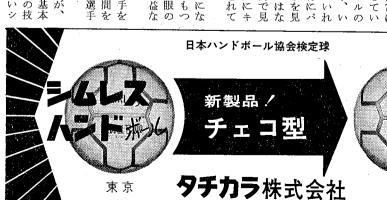
このように攻防両面にわたってこの〃魚眼レンズ〃のような広範囲を視ることのできる眼は必要かくべからざるものであるから、この眼を養成するための練習は十分につまらなければならない。

練習の主体はAの位置に入った選手になる。

Aはボールをキャッチしたならすぐにパスをかえす。Aがパスした瞬間には、次のパスがAに向って放される。二個のボールのどちらかは常に空間にあり、Aは常にキャッチするかパスするかしていなければならない。Aはボールの動きに眼を奪われてはならず、いつでも、4人を完全に眼中にいれておかなければならない。特にパスする相手、パスされる相手を見るようなことは決してしてはならない。常に4人を同様の力で見ていることと、ボールを確実にキャッチし、パスすることを忘れてはならない。

パスはハンドボールの基本になると同時に、ハンドボールのもつとも基礎になる身のこなし、眼の配り方についても、多くの有益な練習をさせてくれる。

十分に時間をかけ、特に相手を入れたパスには、十二分の時間をかけた練習をしなければ良い選手良いチームは生れてこない。

次回には、シュートに入るが、シュートはパスがあくまでも基本になっているものであり、その技術の上にたって、はじめて良いシュートが生れるのである。

連載・リレー寄稿

日本ハンドボール界の課題（4）

～三十周年を迎えた球界に望む～

中西敬一
（福岡協会理事）

三十周年を迎えたハンドボール協会……、一口に三十年とは云うものの、今日のように他の競技には見らないような登録人口四万人、未登録者を含めると二倍、三倍を越えるのではないかと思はれる長足な普及発展を遂げたその陰には諸先輩、指導者の並々ならぬ独身的な努力があればこそと今更のように頭の下る思いがする、と同時に今日まで普及に、技術向上に及ばずながらその一端をけした事に誇りを持つとともに今後の責任を強く感じるものであります。

戦後・物質、資金の乏しい時代、将来えの夢と希望を抱いて愛好者が黙々と競技と取組み、普及発展に奔走した事が次から次えと思い起されて来ます。

世界選手権えの参加、外国との親善交流試合と世界えの進出も著るしく五年後のミュンヘンオリンピック種目として取上げられ益々希望の持てる球界にとって、今後いかにすればよい発展向上するかと言うことを愛好者一人一人が真険に考える時期ではないだろうか。地方に住む愛好者の一員として私なりに感じることをのべる事とします。

協力体制の確立を急げ

本部協会（日本ハンドボール協会）は地方協会・各種連盟といかにすればよりスムースに強力な協力体制がとれるか研究する必要があるのではないか。勿論全国理事会等で大いに討議研究されている事は議事報告書等で知る事が出来るが此の際各種大会での監督、主将会議等の席上で、種々制約を受ける事もあるかと思はれるが形通りの議事運営に走ることとなく、実際に指導されている監督、代表者の意見を聞き討議する時間を設置し、一つでも多くの意見を聴集するよう努力されることを望む。と同時に、地方協会、各種連盟も此のような機会をとらえ個人、加盟チームの意見、日頃思っていることを建設的見地より大いに発言を行い協力体制を整えるべきではないだろうか。

中学校対策について

四十四年には活字として「カリキュラム」に組まれるであろうと明るいニュースを度々耳にしているが。此の点についても地方協会が努力すべき点も多くあると思はれる。

本部協会として文部省、中体連関係等に大いに働きかけるべく今一層の努力を期待したい。又県或はブロックによっては中学大会を開催されているが協会の強力なバックアップを望みたい。

規則・審判について

規則は年々世界状勢により変化することはいなめない事実ではあるが国内において、東日本では、西日本では、学連では等々解釈の仕方が違うことがままあり地方では混乱をまねくこともある。此の点についても各種大会毎に申し合せを行っている現状を年度当初にブロック、或は各県、各種連盟等の代表者構習会を二・三泊の予定で徹底的に討議統一をすべきだと思う。規則・審判と切り離すことは困難であり、本年九月に行はれる公認コーチ講習会と同時に年度当初に開催されるよう望みたい。

全日本教職員大会について

回を重ねること十回、年々その内容も充実はしているものの、年度はじめのスケジュールに、「期日、所未定」とあるのは、いささか淋しさを感じる。指導者である教職員の大会を、もっと重視すべきではないだろうか。

本年神戸で行はれた第十回大会の監督主将会議の席上、荒川理事長をまじえて結論としてアンケートにて、望まれる姿、希望等をまとめることで会を終ったがこれは有意義な集会であった。

本部協会として、アンケートの結果を見て改善すべき所は早急に取組み何等かの方向を打ち出されるよう望みたい。

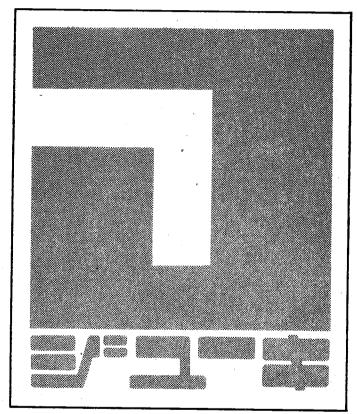
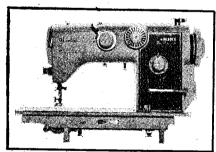
クラブチームについて

高校、大学で取組んだ愛好者も一部を除き、卒業と同時に遠ざかる者が多く何等かの形で、何時までも親しみと、協力を望むためにも、クラブチームの大会を開催すべきではないだろうか、実業団の普及もめざましく嬉こばしいことではあるが、クラブチームでは、とうてい立ち討ち出来ないと、あきらめを持ってしまう。このままではクラブチームの増加は望めないのではないかと思はれる。クラブチーム育成、愛好者ファン獲得の為にも配慮を望みたい。

P・Rについて

このことについては、機関紙等で度々要望されている点で、地方にあっては全国大会の結果も見聞することが出来ない事も度々あり、これではファンの獲得も望めないのではないだろうか。西ドイツチームの来日、ミュンヘンオリンピック開催種目を機会により強力にマスコミに働きかけられんことを望みたい。

以上すでに言い古された事、或は研究されている点等に本部協会え希望ばかり述べましたが、決して本部協会のみに負担をかけるものでは有りません、愛好者の一人としてより普及発展に微力ながら協力しようと云う気持は充分に持つものであります。

最後に選手諸氏に、ミュンヘンオリンピックを目指し、大いなる夢と、希望を抱き、自己錬磨の為、勝利の為、又益々ハンドボールが発展向上すべく努力されんことを望みます。

大崎電気、学生勢降し優勝

＝第19回全日本総合選手権＝

女子は田村紡に初の栄冠

【記録のみ前号既報】第19回全日本総合選手権大会は8月22日、福井県高浜町営グランドに高松宮殿下をお迎えして開幕。男子は各組織推せん18チームと地区予選を勝ち抜いた13チームの合計31チームで、女子は全国から16チームが参加して5日間にわたつて激しい試合を見せた。

その結果、男子はベテランを揃えた実業団の雄・大崎電気（協会推薦、埼玉）が学生界の有力チームを連破して快勝、2年ぶり4回目の優勝を遂げた。女子は予想通り実業団のビッグ・フォアが決勝トーナメントに進み激戦のすえ田村紡（三重）が宿願の初優勝を飾つた。なお、大会終了後、日独最終戦に出場する全日本選手の選考が行われ、男女それぞれ15名（前号既報）を決めた。

男子トーナメント

▽1回戦勝者　大崎電気、芝浦工大、大阪イーグルス、同志社大（以上協会推薦）大阪経大、早大、甲南大、日体大、東京教大、東北大（以上学連推薦）本田技研、宗形製作所、住友化学菊本（以上実連推薦）埼玉教員（関東）氷見ク（北信越）

○……順当な結果のなかで、氷見ク（富山）が東海学生優勝の名大（愛知）を破った健斗が光る。氷見クは今年もまとまりのあるチーム力を存分に発揮してクラブ界からただ一チーム2回戦に進んだのはみごと。関、森、山本を中心にしたむらのない攻撃力が勝因だ。名大は春よりもチーム力が落ちているようで加藤のシャープなプレーだけが目立った。

ダークホース同士大阪イーグルス（大阪）－中京ク（愛知）は技が力を制す結果になった。リードされた中京クは後半じりじりと追いあげ15分には13－13とした。しかし大阪はそのあと東、井上のコンビでチャンスをつくり青木（世界選手権代表）がポイントをあげて再び優勢となり逃げ切った。中京クは安藤（元千代田印刷機製造）、餅原（大崎電気－日本碍子）の巧技に黒川、鈴木の中京大現役を加えて手強い布陣だったが、プレーの荒さを巧者大阪につかれたのは惜しい。

○……好試合が期待された埼玉教員（埼玉）－中大（東京）は北井（世界選手権代表）－結城のコンビによるブロックプレーとGK高橋の堅守を要にした埼玉がうまく試合のペースを握り中大の動きを封じて押し切った。中大は存分に実力を発揮せぬままズルズルと敗れてしまったのは〝若さ〟のせいか。

住友化学菊本（愛媛）－熊本教員（熊本）はともに慎重な攻めあいに終始したが、練習量にまさる住友が要所を逃がさぬ攻撃で加点制勝した。

本田技研（三重）－東北学院大（宮城）も、もつれた展開をみせたが、本田の秀れた個人技と巧みなポストプレーが、新田一人の東北学院大をおさえた。強力チームの試合ぶりは一応安定していたものの、関大（大阪）が大崎電気（埼玉）に、清商ク（静岡）が芝浦工大（東京）に善戦、全日本選手権らしく球趣を盛りあげた。

▽2回戦

全立大（協会推薦）　28－12　大阪経大

全立大はセットオフェンスと速攻をおりまぜて余裕のある試合ぶりだった。大阪経大は全日本学生（7月・駒沢）で一度顔を合わせているだけに守備面では工夫のあとがみられたが、肝心の攻撃面でシュートミスが多く完敗してしまった。（岡村）

埼玉教員　25－15　本田技研

前半、本田は埼玉のディフェンスがさがったところをミドルシュートで得点、守っても北井をマークして善戦した。しかし埼玉はあせらずチャンスをよく活かし優位に立ち、後半は北井の鮮やかなジャンプシュートとGK高橋の好プレーで食い下る本田を降した（岡村）

早大　21－13　宗形製作所

早大は前半旗野、萩原ら左サイドからの攻撃に成功、後半は速攻から多彩なシュートを放って得点した。

宗形はゴール前でめまぐるしくボールを廻したもののチャンスをつかむことが出来ず、体力差もあらわれて敗れた（金原）

大阪イーグルス　29－17　甲南大

甲南大は大阪イーグルスの気合いの入らぬ攻防をついて久光の好リードとフリースローで得点、5点差をつけて前半を終った。

後半になると大阪はみちがえるようなプレーを見せ、プレス気味のディフェンスからボールを得てあっさり逆転、相手シュートの失敗からつかんだ一気の速攻もさえて最後は〝快勝〟となった。しかし前半のもたつきは感心できない。（岡村）

大崎電気　29－12　氷見ク

前半氷見クは大崎のミスプレーから先行、そのあと主導権を握られたもののGK中野の好守などでよく食い下った。後半になって大崎は氷見の攻撃をうまく断ち切り、攻めては近藤（世界選手権代表）、井上、竹野らがやつぎばやにゲット、順当勝ちした。（佐野）

日体大　31－13　住友化学

練習量と体力にまさる日体大は住友のシュートミスからチャンスをつかんでスピードのある攻撃を

展開、前半で大勢を決した。

住化は遅いペースに相手をはめこむ策戦だったのだろうが、現役学生の強い当りに押しまくられ、序盤から主導権を握られてしまったのが誤算だった。（日野）

東京教大　32－16　同志社大

全日本学生に欠場した同大の試合ぶりに注目が集まった。

教大はセットから同大ディフェンスを突破、平岡のロング、川島のポストプレーなど変化のある攻撃で得点をあげた。同大も飯田（世界選手権代表）のロングシュートで対抗したが、チーム全体の動きにスピードがないため、相手のディフェンスの崩れを誘えず次第に点差をあけられた。

後半に入ると、大西のリードを活かした教大が波に乗った攻撃で大きく引きはなし、最後はダブルスコアとなった。

同大の課題は速い動きのセットプレーで飯田の強肩をどういかすかではなかろうか。学生同士らしい力のこもった一戦だった。（加藤）

芝浦工大　38－14　東北大

東北大のスタートはよかったがそのあとミスがつづいて試合のペースを握れず、逆転を許したあとは芝工大のクイックプレーにつけなかった。順当な結果とはいえ芝工大も決してよいできではない。

最後までゲームを捨てなかった東北大の学生らしいファイトに好感がもてた（遠藤）

▽準々決勝

全立大　34－18　埼玉教員

	【立教】	得	【埼玉】	得
GK	川口	0	高橋	0
GK	天野	0	久保	0
FP	木野	8	金子	0
FP	東	5	三枝	0
FP	北井	2	松田	2
FP	野田	5	北井	4
FP	北村	2	多勢	0
FP	小野口	5	結城	5
FP	戸田	2	高戸	0
FP	倉前	1	樽川	0
FP	有氷	4	高田	7
		34		18

（主審　加藤）

前半、埼玉は北井、高田らの好技で15分には7－3とリード、うまいスタートを切った。

しかし20分をすぎる頃から全立大は攻撃のテンポが整い追いあげから一気に逆転した。

後半に入っても全立大得意のセット攻撃は乱れず、ブロックプレーと長距離からのシュートをうまく使いわけて快勝した。

埼玉は強肩高田に後半はボールを集めて反撃を狙ったものの、ディフェンスで詰めの悪さを露はして敗れた。（岡村）

芝浦工大敗れる

東京教大　26－18　芝浦工大

	【教大】	得	【芝浦】	得
GK	上野	0	山村	0
GK	水藤	0	高橋	0
FP	川島	8	竹内	2
FP	小山	0	近森	6
FP	大西	5	小林	1
FP	平岡	5	山田	0
FP	畑	6	明石	0
FP	古屋	0	白神	0
FP	稲垣	0	秦	2
FP	浅野	2	村上	6
FP	斎藤	0	高鍬	1
		26		18

（主審　岡本）

両チームともクロス・プレーで相手ディフェンスを崩し、教大は平岡、芝浦は近森（世界選手権代表）が高い位置からロングシュートを決めるという動きのある好試合になった。

押し気味に試合を進めていた教大は、後半15分あたりから芝浦の突進が止まったスキをよくついて速攻とポストプレーでポイント。ここが勝負の岐れ目になった。

教大は春の関東学生でも10点差で勝っており、その自信とスケールの大きいチーム力を存分に発揮したことが勝因。GK上野の再三の美技も賞されよう。

芝浦工大がこの大会でベストフォアに残れなかったのは3年ぶり。逆に教大系の準決勝進出は昭和33年（第10回・下関）以来9年ぶりのことだ。（岡村）

大阪イーグルス　21－10　早大

	【大阪】	得	【早大】	得
GK	島崎	0	綿貫	0
GK	広川	0	山本	0
FP	松尾	2	木口	5
FP	山崎	1	籏野	1
FP	奥浜	0	伊藤	0
FP	東	2	朝日	0
FP	井上	1	小島	0
FP	青木	10	萩原	1
FP	加藤	5	森田	3
FP	北岡	0	鈴木幸	0
FP	木村	0	鈴木博	0
		21		10

（主審　佐野）

序盤はともに激しい攻防で甲乙つけがたかったが、時間の経過とともに老巧な大阪は青木、加藤の好技をうまく活かしてペースを握り、大きくリードした。

早大は力はあったがシュートが雑で、ディフェンスも甘かった。

体力があるだけに、じっくり攻め、守るべきではなかったろうか。相手の乱れとスキをついた大阪の試合のうまさは相変らずみごと（佐野）

大崎電気　20－17　日体大

	【大崎】	得	【日体】	得
GK	福本	0	加藤	0
GK	下里	0	本田	0
FP	金田	1	神谷	1
FP	井上	5	福井	1
FP	近藤	7	高橋菊	1
FP	西村	2	樫塚	3
FP	竹野	4	早川	0
FP	片山	0	大宮	2
FP	加藤	1	高橋益	4
FP			井上	3
FP			森	2
		20		17

（主審　岡村）

開始直後、日体はすばらしい速攻から1点をあげ好調なスタート、さらに大崎GK（福本）の危険行為による反則退場の間にもポイント、日体大ペースで試合は運ばれた。

しかし、大崎もゴール前の混戦から巧みにチャンスをみつけ出して小刻みに得点を返し、タイにこぎつけて前半を終はった。

後半、大崎は速攻からリード、日体大もよく反撃したが15分をすぎるあたりからディフェンスに甘さがのぞくようになり、大崎につけこまれた。また攻めてもシュートミスや凡プレーでみすみすチャンスを逃してしまった。

勝負をわけたのは中盤10分間の安定度といえよう。

前半のせりあいに比べ、後半は両チームとも動きが鈍く、内容的には今ひとつ盛りあがりを欠いた。（岡村）

全立大一方的に勝つ

▽準決勝

全立大　28（17－5／11－4）9　大阪イーグルス

	【立教】	得	【大阪】	得
GK	川口	0	島崎	0
GK	天野	0	広川	0
FP	木野	5	松尾	0
FP	東	4	山崎	3
FP	北井	1	奥浜	2
FP	野田	4	井上	0
FP	北村	5	青木	1
FP	小野口	3	北岡	2
FP	戸田	2	加藤	1
FP	倉前	1	東	0
FP	有永	3	木村	0
		28		9

（主審　岡村）

ベテラン揃いの大阪が、攻撃力抜群の全立大に対してどのような策戦で向かうか大いに期待と注目が集ったが、スロースターターといわれる全立大が、この試合は立ちあがりからすばらしい攻撃をみせて、大阪につけこむスキを与えず一方的に押しまくってしまった。

全立大としては、大阪の老巧さに誘われることを充分警戒していただろうから、この機先を制するスパートが実ったのは大きな効果があった。大阪は東を軸にゴール前よく動いたものの、若さにあふれた全立大の守備網を崩すまでにはいたらなかった。（荒川）

東京教大惜しくも敗る

大崎電気 22（11―10 / 11―10）20 東京教大

【大崎】	得	【教大】	得
GK 福本	0	GK 上野	0
GK 下里	0	GK 水藤	0
FP 金田	2	FP 川島	2
北村	0	小山	1
井上	3	大西	2
近藤	9	平岡	10
西村	2	畑	3
竹野	2	浅野	2
片山	0	古屋	0
加藤	4	稲垣	0
田口	0	斎藤	0
	22		20

（主審 柳沢）

緒戦から激しい攻防の応しゅうとなり準決勝にふさわしい迫力のある好試合となった。

大崎は、ゴール前のローリングから相手ディフェンスが気をぬいたスキに左サイドからのシュートポストプレーカットインと多彩な変化をみせて得点をあげ、一方の教大は平岡の強力なシュートと浅野、畑の好技をうまく溶けあわせ互角の試合ぶりだった。

後半に入っても、たがいに試合のペースを握るほどの決定的な展開がないままに経過したが、勝負どころを確実に決めた大崎のゲーム運びのうまさが、僅かな差で、教大の力と若さをおさえた。（柳沢）

全立大2連勝ならず

▽決勝

大崎電気 20（10―10 / 10―3）13 全立大

【大崎】	得	【立教】	得
GK 福本	0	GK 天野	0
GK 下里	0	GK 川口	0
FP 金田	0	FP 木野	2
加藤	0	東	3
井上	6	北井	2
近藤	4	野田	0
西村	5	北村	4
竹野	5	小野口	2
片山	0	有永	0
田口	0	倉前	0
		加藤	0
	20		13

（主審 佐野）

2連勝を狙う全立大はこの大会も好調で前日までの3試合に90得点（失点39）、決勝の前評判も有利であった。

しかし試合がはじまってみるとディフェンスの出足がわるく、そこをベテラン揃いの大崎に攻めこまれ試合の主導権を与えてしまった。

大崎は、負傷者を出していたにもかかわらず竹野、井上の好リードで着実な攻撃をみせ、守っては出足のよい当りと、ポストのマークで全立大の動きを封じた。木野（世界選手権代表）のロングシュートを再三にわたってブロックした竹野の守備面での活躍も勝因の一つであろう。

後半、奮起した全立大の追撃に期待がかけられたが、前半の7点差は、さすがに負担。とられたらじっくりとり返す大崎が各人の持ち味を活かして後半は疲れがわずかに見えたが互角に試合を進めて優勝した。全立大は予想、戦力とも有利を伝えられ、それがかえってわざわいになったようだ。（岡村）

実業団、今年も上位独占

女子

▽予選リーグA組順位①大崎電気（埼玉）3勝②ブラザー工業（愛知）2勝1敗③有磯高（富山）1勝2敗④宗形製作所（大阪）3敗

○……予想通り大崎が圧倒的な強さをみせて決勝トーナメントに進んだ。ムラのない攻撃力と動きのよい守備力からみて当然だ。

新顔同士のブラザー工業―宗形はブラザーが井上、家田、堀田の活躍と、まとまりのあるディフェンスで快勝した。

実業団にはさまれた有磯高は宗形を13―5で降し、ブラザーに5―7と善戦。その気力を大いに賞したい。

▽同B組順位①田村紡（三重）3勝②三菱鉛筆（神奈川）2勝1敗③小松市女高OG（石川）1勝2敗④美和ク（兵庫）3敗

○……注目の東海、関東実業団ナンバーワン同士の田村紡―三菱鉛筆は熱戦となった。

速攻の広酬、カットイン、ポストプレーとその展開も豊富。わずかに前半田村紡が小林の好ゲットなどで優位にたち、追いすがる三菱を押し切った。三菱もよく走ってはいたが、田村紡のとび出しの早いディフェンスにあってシュートチャンスをつかめず、長身・蓮見のシュート力を活かし切れなかった。

二つのクラブチームは若手OGの情熱によってささえているようだが、意欲と技術がアンバランス。実業団から2点とるのがやっとだった。

▽同C組順位①大洋デパート（熊本）3勝②清水女高（静岡）2勝1敗③福井ク全（福井）1勝2敗④日女体大（東京）3敗

○……大洋デパートが文句なく3勝。各試合とも力の差がはっきりして盛りあがりに乏しかった中で清水女高・藤原が3試合で15点を点をたたきだした攻撃力がひときわ光った。

地元全福井クは日女体大をダブルスコアで破る好スタートを切ったが、その後は完敗に終わった。

▽同D組順位①愛知紡（愛知）3勝②日体大（東京）2勝1敗③東京重機（東京）1勝2敗③福井商（福井）3敗

○……学生1位の日体大が愛知紡にどのような試合を見せるか。予選リーグ中きっての好カードは、愛知紡がスピートに一日の長をみせて逃げこんだ。

立ちあがりから両チームとも固くなり動きが鈍かった。先手は7分日体大（北口）がとったが、愛知紡もすぐ小林、前田、関口のゲットで逆転、4―2としたあと後半早々2点を加えて主導権をとった。日体大としては後半追いこむ態勢をととのえた所で2点を失ったのがひびき宿願のベスト・フォアを惜しくも逃がした。東京重機は飯田につづく選手の成長が待たれる。

大崎、愛知紡を降す

▽決勝トーナメント1回戦＝準決勝

大崎電気 12（5―3 / 7―5）8 愛知紡

【大崎】	得	【愛紡】	得
GK 川崎	0	GK 尾崎	0
GK 山田	0	GK 中下	0
FP 加藤	1	FP 小林	0
早川	3	前田	3
鈴木	2	五十嵐	0
小林	4	小野	3
栗林	0	関口	2
木幡	2	黒木	0
山崎	0	藤池	0
神藤	0	岩崎	0
久保田	0	山下	0
	12		8

（主審 柳井）

両チーム必要以上に緊張、動きの悪さからパスミスやシュートミスが目立つ。その失敗につけこむだけの〝巧さ〟が両チームともになく、トップチームの対戦にしては味のない展開に終始した。

試合のペースはわずかに動き勝っていた大崎が握り、前半のリードを後半いちど愛知紡の反撃を許したものの、エース早川の好技を

主力にして押し切った。

愛知紡はいちじのスランプは脱け出たようだが、あと一歩スピードが欲しい。（柳井）

清水が決勝シュート

田村紡 11（5－5、6－5）10 大洋デパート

【田村】	得
GK 渡辺美	0
GK 坂上	0
FP 種村	1
FP 渡辺好	1
FP 水谷	2
FP 小林	4
FP 清水	2
FP 長谷川	1
FP 甲村	0
FP 吉開	0
FP 渡辺信	0
	11

【大洋】	得
GK 小原	0
GK 安部	0
FP 新保	3
FP 垂水	3
FP 渡辺	2
FP 射場	0
FP 今村	1
FP 枝尾	1
FP 三宅	0
FP 米	0
FP 田中	0
	10

（主審 加藤）

上背に優る大洋は新保・垂水を中心に大きな動きから得点を狙い田村紡は相変らず全員が敏しような動きから小さな速いパスでゴールをおそった。

この対照的な試合運びで戦況は互角となり、まったく予断を許さなかったが、試合終了55秒前10－10から田村紡は渡辺好のシュートがゴールにはね返るところを清水がすかさず拾って貴重な決勝シュートをはなち大洋を降した。

どちらも、持ちあじを存分に活かした大会屈指の好試合であった。（加藤）

大崎得意の速攻出ず

▽決勝

田村紡 7（3－2、4－3）5 大崎電気

【田村】	得
GK 渡辺美	0
GK 坂上	0
FP 種村	1
FP 渡辺好	1
FP 水谷	1
FP 小林	3
FP 清水	1
FP 長谷川	0
FP 甲村	0
FP 吉開	0
FP 渡辺信	0
	7

【大崎】	得
GK 川崎	0
GK 山田	0
FP 加藤	0
FP 早川	2
FP 鈴木	1
FP 小林	1
FP 栗林	0
FP 木幡	1
FP 山崎	0
FP 神藤	0
FP 久保田	0
	5

（主審 岡本）

昨年全国4タイトルを二つづつ分けあった両者が、今シーズン初の対戦。期待通りの接戦となった故障者の多い田村紡は、いつもより動きにスピードがなかったが、それでも要所は敏しようなプレーをみせチャンスをつかんだ。一方の大崎は、田村の固いディフェンスに一気の速攻がほとんど出せず苦しんだ。

ディフェンスの崩しあいということになれば、エリア周辺でち密な動きをみせる田村に分があるわけで、大崎としては、メンバーの若返りから、チーム力を発揮させる突破口を見つけ出す力に欠けた。互角の両者の勝負を色分けたのはこの点にありそうだ。

田村紡はこの大会に出場6年目で初栄冠、大崎は2連勝を阻まれた。（岡本）

女子の試合方式決める
16チーム以下の場合

日本協会常務理事会ではこのほど全国大会（主として全日本総合選手権）の女子部門で参加が16チーム以下の時は、原則として「リーグ・トーナメント型式」で大会を運営することを申しあわせた。

実施にあたっては、参加チームを2組又は4組に分けてそれぞれ予選リーグを行い、各組の勝者または上位2者によって決勝トーナメントを組む。

決勝トーナメントの組合せは、出場チームの前年度成績順位によって①対④、③対②とする。

お詫び 前号8頁の全日本総合選手権速報記事中、自衛隊勝田の所属を（関東・埼玉）としましたのは（関東・茨城）。また45号6頁にも同じような間ちがいをしました。お詫びして訂正いたします。

全日本総合選手権年次優勝者

		男子	女子
①	昭25．1	日体桜	愛知ク
②	昭25.11	スワロー松	全山梨
③	昭26	スワロー・ク	東京芙蓉ク
④	昭27	セントポールA	（女子行われず）
⑤	昭28	全日体大	全静岡城北高
⑥	昭29	全日体大	全静岡城北高
⑦	昭30	西日本日体OB	水海道二高
⑧	昭31	全日体大	半田高
⑨	昭32	全日体大	愛知紡
⑩	昭33	全日体大	愛知紡
⑪	昭34	芝浦工大	愛知紡
⑫	昭35	芝浦工大	愛知紡
⑬	昭36	芝浦工大	愛知紡
⑭	昭37	大崎電気	愛知紡
⑮	昭38	立教大	大洋デパート
⑯	昭39	大崎電気	大崎電気
⑰	昭40	大崎電気	大洋デパート
⑱	昭41	全立教大	大崎電気
⑲	昭42	大崎電気	田村紡

〔参考・戦前の全日本選手権〕

		男子	女子
①	昭12	大塚ク	（女子行われず）
②	昭13	日体専	（女子行われず）
③	昭15	日体	倉敷高女
④	昭17	日体ク	倉敷高女

夏の全日本選手権回顧

第19回 全日本総合

嶋田新太郎

男女四十七チームの精鋭を集め高松宮をお迎えして盛大に開催された本大会は、女子の部は全日本総合大会では始めての予選リーグを行い勝者のトーナメント式を採用して新設の町営体育館で行われた。

予想通りAブロックでは前年の覇者大崎電気工業KK、Bブロックは新進の田村紡績KK、Cブロックは強豪大洋デパート・Dブロックでは大学の優勝校日本体育大学を破ったベテラン愛知紡績KKが進出し、激戦の結果田村紡績KKがエリヤ前のプレーに優り大崎を七対五でふり切って初優勝を飾った。

男子は全立教大学が進境著しい埼玉教員を降し、大阪イーグルスは波にのった早稲田大学を軽くあしらってベテランぶりを発揮、大崎電気工業KKは若手日本体育大学を接戦の末振り切り、東京教育大学はシードされている芝浦工業大学の猛攻を好守GKの上野にはばまれ闘志の勝利を得た。

四強の戦いの結果は全立教大学と大崎電気KKが勝ち残り、大崎の捨身が自信にかかわり、全立教大学の乱れに乗じて加点、ベテラン竹野の好プレー、西村、近藤、井上の得点は素晴しかった。全立教大学は強肩木野のシュートが外れ予想外のことから、いささか慌て気味でずるずると大崎のペースにはまり後半の追いこみも前半の傷が深く、大崎電気工業KKが四回目の優勝を獲得五日間の大会は静かに幕を閉じた。

さて北陸地区で10年ぶりに開かれた今大会の運営面をふりかえってみると、まず天候に恵まれたことである。次に高浜町の実行委員会の献身的体当りの努力は立派で

第10回 全日本学生

杉山　茂

前哨戦の東西大学定期戦で、関東諸校が関西勢を圧倒しており、今年も優勝は関東勢同士で争はれることは予想されていたのだが、なんとベストエイトにずらりと関東春の一部校が並んだのには驚ろかされもしたし、あぜんともした。

関東学生界と他の力の差はだいぶ前から云われていたが、今年ほどはっきり現われたこともあるまい。

強者が勝ち残ることは当然のなりゆきでとりたてて騒ぐにあたらないのだが、関東の強さというより、他地区の非力に原因がある点、すなおにこの現象を喜べないのだ。

関東の手から選手権を奪うことは、個々のチームの課題というより、各学連単位の問題のような気がする。

特に、かっては学生界の王座に君臨した関西学連にこれはあてはまる。

同じ学生――そう力に差があるハズはないのだ。ただ関東勢は互いによく研究しあい刺激しあっている。選手はもちろんコーチ陣やOBたちもよい意味での〝対抗意識〟を燃やしつづけている。関西やその他の地区にそうした情熱がないというのではない。しかし、見聞する範囲では関東ほどのエネルギーを感じることはできない。次の機会にこそ、他地区の精鋭が関東の一角を切り崩すことを切望したい。それがなければ全日本学生界の発展はあり得ないのだ。

ところで大会そのもの、試合そのものはかなりレベルが高く好内容であったといってよいだろう。

戦法的にも若い力を存分に盛りこんで迫力があった。

第10回 全日本教職員

増岡茂義

思えば才月の流れは早いもの、知らぬ間に、この大会も十回目を迎えていた。参加チームも多くなり、これに東北、北海道チームの参加があれば、大会の盛上りも最高になるだろう。さて、総体的に見て大阪イーグルスが飛び抜けた力をもっており、他チームとの差が大きすぎて、手に汗握る試合がなかったことは誠に残念であると同時に、他チームの一層の努力をうながしたい。

大差の試合が多いだけに、幾分だれ気味に見受けられたことは、もう少し防禦面に研究する余地がありそうに思われる。

最も教職員と云う特殊な構成故に、大分年令的な差があるので、やむを得ない事かもしれないが……。

又実業団、或はクラブチームと違って、職業上、又は全県下に渡ると云う地理的なの条件中に練習時間を作る事が、むずかしい問題であることは良く理解できる。

この辺の解決が今後に残された問題と思われる、これは本大会ばかりではないが、トーナメント方式についても少し研究すべき点があるように思われる。平常指導者としての先生チームであれば、貴重な時間と経費をかけて一回だけでは、充分な勉強もできないだろう。特に指導者であれば、己の勝負よりも、試合を通しての勉強が後々の指導に、大いに役立つ事は明らかである。

各種とも実施している小ブロックリーグ等は実現できないものだろうか。

プレー、レフェリングなどに進歩がみられる中で一つだけ残念に思ったことがある。それはマナーだ。反則をされた選手が大げさなゼスチュアと声をあげていたこと

あった。事務局長小島山助役のテキパキしたさい配で見事大会は無事終了した。宿舎・交通・接待等選手関係については随分細部に亘って行届いた配慮があり、選手団から仲々評判がよかった。競技場は新設の体育館、四面のアウトグランドは随分手を加えて整備されていた。テント、その他の用具もよく整い競技に支障がなかった。

競技役員特にゴールジャッジは体育協会の役員、小中学校の先生方が昨年から数回にわたる講習会を経て、終始熱心に研究的な態度で真面目に勤めてくれたことに敬意を表したい。

ボール拾いの高校中学校ハンドボール部の働きも一生懸命、日本最高の試合を眼前に自分の努めを忘れがちなものであるが、ボールを懸命に追う姿は熱戦とともに忘れられないものであった。

ところで地元にお願いが一つある。来年の国体を控えての配慮は十分なされているが、一般の人達がもっとハンドボールに親しみがもてるよう公報活動をしてもらいたいことだ。

競技場にも観客を動員するよう努めてほしいこれがハンドボールを理解する又してもらうことではなかろうか。

終りにハンドボール関係者特に監督選手の健康管理についてお願いしたい。

参考に今大会期間中の取扱った救急患者数をあげて見たい。

病名	数
打撲	5
切傷	6
さっか傷	23
骨折	2
腹痛	13
捻坐	18
その他	3
入院患者	2

夏季であるための病気も勿論あるわけであるが、お互いに注意すれば防げるものもある。勝ったため監督も選手も随分張りつめていることはよく分るが、健康管理を怠ってはならない。（大会副審判長）

オリンピックをめざすからにはトップレイヤーはすさまじいばかりの執念をたえず見せて欲しい。

優勝した立大はそうした点で圧倒的に秀れていた。立大の強さは定評となっている緩急をわきまえた試合展開力よりもむしろそこにあるのではないか。

芝浦工大、東京教大、法大、日体大などもプレーへの執念では立大に優るとも劣らなかったが、体力的な安定度に欠けた。中大、早大などはその逆が欠点となった。

準々決勝までに姿を消したなかで明大、明星大、大阪経大、関大、中京大、西南学院大、桃山学院大などが上位と紙一重の力を示した。これら各校がゆるぎない地力を備えた時こそ、学生界が文字通り日本ハンドボール界のトップゾーンとなる時であろう。

3回目を迎えた女子はいぜん日体大の独り舞台。関東学生春季で肉迫した期待の東女体大もこの大会では逆に差をあけられてしまった。

優勝した日体大もふくめ、まだまだスピードに乏しい。実業団上位を相手とするまでには相当な時間が要りそうである。学連首脳は「レベル向上よりも普及の段階」と割り切っているがせめて、高校以下などという酷評が再燃しないよう各校いっそうの精進だけは期待したい。

運営面では大会前日の代表者会議でかわった質問が出たので書いておく。東海学連からの出場校が2年つづけて第一日にダブルヘッダーとなった〝不運〟へのものだ。日本協会の主催する大会は原則として一日2試合を組まぬという方針だが、日程消化の都合で一部のチームだけが貧乏クジを抽く。

全日本学生の場合、1・2回戦では同学連の顔合せをつとめてさけるという不文律があり、そのため出場校の多い関東、関西学連より地方学連が2試合を強いられるケースが多くなる。関東同士といっても一部校と二部校というようなランクの差を活かすようにすれば、地方勢だけにしわ寄せが来る率は現状より少くなろう。

学生スポーツの本旨から抗議の通るスジ合いのものではないが組織としては再考してよい。（NHK運動部）

である。審判が正しい判断をくだしているにもかかわらず、もっと反則をとれと云わんばかりの態度は、選手としては行き過ぎではないだろうか。昔の話をすれば笑われるかも知れないが、昔の選手は反則をされても、審判に反則をとってくれよりも、反則を振りきって得点することに全力をつくしていたものである、その結果審判が正しい判断を下してくれるものである、反則をとりゴール前のフリースローが必ず得点に結びつくものであれば、現代選手の態度も或る程度うなずけるが私の見たかぎりでは、得点の大半は速攻時にあり反則で中断される事は味方にとって不利になることは明らかである。とすれば、何故に大きなゼスチュアで、倒れなくてもよい時に倒れ不利になるプレーの中断をするのであろうか、三日間観戦してどうしてもこの点の解答が私には出来なかった。

地方に帰れば指導者としての教員選手であれば、増々問題が大きいように思われる。

【写真は大阪イーグルス対埼玉教員の決勝から】

若し、このプレーを高校生がまねたらどうなるだろうか、オリンピックどころか日本ハンドボールの進歩は全く期待出来なくなってしまうだろう。（兵庫協会理事長）

夏の全日本選手権回顧

全日本高校 2連勝までの苦心

高橋英次（東京・明星高監督）

昭和三十八年四月、我が国ハンドボール界にとって一大転換期を迎えた。それは十一人制から七人制へと国内の大会はすべて変ったということである。

その年インターハイに6年ぶりに出場し国体へ8年ぶりに出場した明星はその国体二回戦に於て中京商に明星始まって以来の大差で敗れた。この大敗は自分にとって非常によい刺激となった。

考えさせられた大きな問題として、第一にスピードの養成、第二にディフェンスの強化、第三にセットオフェンスの完成であった。

その中でも特にディフェンスの強化をいかにするかという事であった。この事はディフェンスが弱ければ絶対に速攻ができないということになり、速攻ができなければ点が取りにくいということである。速攻も大きく三つに分けて行うということであった。

第一は直接ゴールキーパーから最前方に走っている味方にパスをする方法、第二はボールを近くの者にパスし、それを前方に走っている味方にパスをつなぐもので、第三はボールを同じく近くの者にだし、相手の守備体型のととのはぬ所をつき、ポストプレイを行うか、ロングシュートを行う方法である。

ディフェンス面に於て当時は二―四及び一―五の体型が半々ぐらい使われていた。ただ何んとなくそういう型をとっているだけでは基礎プレイの未熟な高校生ではうまく守りきれないので、フォーメーションを作ってやりボールの位置によってそれぞれのポジションの動きをきめてやり、その動きを基本として変化させていったらという事を考えた。それには基本型はどういう型がよいかということで相当考え、現在もやっている一―二―三の型をとることにし、生徒にはピラミットという名称でおぼえさせた。そしてボールの位置、相手の攻撃に対して変化させ、つぶし方のタイミング等を身につけさせた。

その間はもちろん個人抜の養成、体力、コンビネーションプレイの養成も行った。

昭和三十九年は元旦から練習を開始した。一月は筋力及び持久力の養成、二月はそれに個人技、ポストプレー、以後は速攻、総合練習と行い七月十一日期末考査も終りインターハイ上位入賞を目指し、猛練習を開始した。午後一時半より七時まで、途中三十分の休息を入れただけで正味六時間というものをセットオフェンスの完成を目指し、フォーメーションを主に行った。その間関東大会もあったが一日も休みをとらずインターハイにそなえ練習した。十五名の部員が一人も落伍することなく頑張ってくれた。その努力が実り上田市にて開催された第十五回インターハイに初優勝を飾ることができた。優勝したということで翌年は中学校で経験者が十数名入部して来た。その連中が現在の三年生である。以後毎年若干改良はしているがほとんど同じような練習を繰り返して行っている。このようにして、昨年は長年夢みていた桜台高校に決勝戦に勝つことが出来た。特に優勝などということは頭の中になかっただけに感激もひとしおであった。

今年は昨年よりすべての面で一歩でも前進するべく努力し、コンビネーションプレイの完成を目指し練習した。全員が中学での経験者であり、昨年のレギュラーメンバーが五人も残っており余程強いチームがでてこない限りは優勝できるのではないかと思っていた。全国大会ともなるとどんなチームが表われるか分らないので全チームのプレイを見るまではかなり心配であった。大会に望んではチームワークのみだれを特に注意した。結果はどの試合も前半で勝負がついたので後半は非常に楽な気持でいられた。この事は昨年と大きな違いといえた。技術的にはスピードが一段とついた事が第一で全員がハンドボールをよく理解していることもあると思う。スピードがついたことによってデイフェンスもよくなり、速攻も多くでるようになったので得点力も相当上がった。

ところで追われる立場の心境ということをよく聞かれるが、私しの考えは高校生のチームというものはメンバーの程動が毎年激しく行われるものなので、その年々によってチーウの目標が変ってくる、部員の技術、体力に応じた練習をしなくてはならないので追われているというような意識は持っていない。

すくなくともインターハイには毎年参加できるよう部員共々頑張って練習に励みたいと思っておりいつそう精進に励みたいと考えている。

全日本高校 初優勝の夢を果して

木原正和（岩手・花巻南高部長）

昨年度のインターハイが岩手県で開催され、幸い地の利を得て、初の準優勝を飾ることができた。今年度は遠く会場が和歌山であり、その意味では私たちの実力を問う絶好の機会とはいうものの、主力選手四人が抜けた全く新しいチームのことであり、技術面からみてもせめて昨年度の栄誉を汚さない程度、せいぜいベスト8位までには残りたい、そのような必死の願いが一人一人の選手の気力に反映した勝利であったと思う。

ハンドボールに全く無知の私が監督に就任したのが四年前、当時は七人の選手を確保することで精

一杯、部員の中には進学と学習クラブ活動にあせりを感じ不安定の生徒が大半であり、練習に参加する部員がわずか一、二名という状態が続いた。かかる貧弱な体制の中に若い高橋コーチを迎え、技術指導の一切を使頼、私は部員の学習、健康の管理を担当、精神面と技術面の均衡を保ちながら地味な練習が続けられてきた。父兄の理解と関心も次第に高まった。

真冬酷寒のグランドに、一人の落伍者もなく、きびしい、かけ声が、気迫に光ちた練習を見ることができるようになった。

今日も明日も、ただ走り、走り抜く運動の反覆、その中に絶ゆまざる不屈の気力が養われその一つ一つが自信となって培われてくる。今回の優勝は一人一人がよくその練習に堪えた気力の勝利であったのだと、手を取り合って勝利を味あう。元来本校チームは速攻を武器としたチームであり、それが又一面、個人技に走り易い次点を伴う。今年度はチーム全体が小型であり、特に脚の早い選手もなく、デフェンスを中心とした攻撃に切り替えたチーム作りが、小型ではあるが一応の、チームプレーという、ごく基本的な精神に徹したことが大きな成長であったと思う。

「初心忘るべからず、慢心こそ最大の敵」を今後のチームの戒めとしたい。

思いがけなかった優勝

（花巻南主将）三浦　朝子

一応優勝候補となっていましたが、今年は去年のチームより戦力も走力も劣っているので、ベスト8に残れば上出来だと思っていました。去年準優勝ということもあり、頑張りたいとは思っていましたが、優勝するとは思ってもいませんでした。準決勝の新居浜商との試合では、心ばかりあせり皆ちぐはぐだったので、決勝戦では一致協力しないことには、強敵室蘭を倒することが出来ないということを自覚し、ポイント・ゲッターの姫野さんを徹底的にマークしたことが、勝利に結びついたと思います。優勝した瞬間はただボーッとして実感がわきませんでした。

練習の苦しみ吹き飛ぶ

（花巻南3年）川井　律子

一、二回戦で強敵のチームが続続姿を消していった。それを見ているうちに明日は私達という不安としかし又、だから頑張らなければという自覚が湧いてきました。さりとて優勝するというようなことは当初から考えてもみなかったが、東北の暑さと違がって、日増しにつかれが目にみえてきたがただ気力だけは他のチームよりは増さっていたと思う。決勝戦はさすがに緊張していたらしく、結果は五対四で私たちの勝利で勝った。優勝旗を手にした時は、毎日の苦しくきびしい練習が一度にふっといでしまいました。

全員の協力が実る

（花巻南3年）関　優子

私達は第一戦の深谷女子高と試合をするまで、自分のチームがどの位やれるのか全然見当がつかなかった。ただ、『高級な技術なんか、できるはずがないからするな。そのかわり基本、つまりパスキャッチが良いことと走ること、それに気力があれば絶対勝つ』とおっしゃる先生方やコーチの教えを守り、皆協力して、一生懸命やったのが一番の勝因だと思う。

正しい守備技術の習得を

～全日本高校選手権総評～

林　静也

やけづくようなグランドいっぱいに、全国から集まった若いハンドボールマンの意気と熱が発散し、終始好ゲームが展開されたことは〝オリンピック種目〟への採用〝という明かるい報せに活気を呈している日本ハンドボール界にとつて何にも勝る喜びであった。

男子では優勝した明星（東京）が超高校級の力を随所に発揮し、そのすばらしく多彩な攻撃力と堅固な守備力をもって、抜群の成績を残したことは賞讃のほかはない

また、決勝で破れたりとはいえ、終始高校生にふさわしいグランド・マナーと落ちついたプレーで1回戦から準決勝まで連続逆転勝ちという粘りを発揮した準優勝校広（広島）の健斗も特筆すべきであろう。

このほか伝統の桜台（愛知）、添上（奈良）、氷見（富山）新鋭横浜東（神奈川）、湯沢（秋田）、中大附属（東京）らの活躍がめだった。

女子はベスト・フオアに勝ち残った花巻南（岩手）、室蘭商（北海道）、山陽女（広島）、新居浜市商（愛媛）はいずれもその持ち味を存分に活かしての進出であった。

結局、昨年2位の花巻南が三浦を中心に攻守によくまとまりを見せて初優勝、室蘭商も姫野を駆使して頑張り、ついに初の準優勝を遂げた。

技術面では男女とも守備技術の未熟さにともなうラフ・プレーが、前半戦で特にめだったが、身体接触によりおこる各種反則を禁じているルールの原則にさかのぼって守備技術の習得に励んでもらいたい。

また速い動きの中でのすばやい正確なパス、キャッチをチーム全員が連繋プレーの中で身につけることが、ハンドボールの水準向上の意味で必要であろうと思う。要は基本を忠実に実践することにあるのではないか。

しかしグランドコンディションの悪い状態の中で黙々と健斗をつづけ、好ゲーム、好プレーをくりひろげ、内容ある大会へと盛りあげてくれたことに対し、各校監督の御指導と選手諸君のフェアプレーに心から感謝の意を表明するものです。

また大会運営面では、高校ハンドボール界のために連日審判をつとめていただいた審判団各位と、コート整備、記録、救急、報道など地味な仕事をつづけられた地元役員と生徒諸君に対し、深甚なる謝意を表するものです。（大会副審判長）

来年は広島で

第19回全日本高校選手権は43年7月29日から8月3日まで広島県廿日市高で行われる予定。

第17回全日本学生選抜東西対抗

多彩な攻撃で東軍3連勝

西軍、後半の奮起空し

学生界のトップスターによる第17回全日本学生選抜東西対抗は9月17日午後2時から日独女子第6戦にさきだち観衆四千を集めた愛知県体育館で行われた。

試合は予想通りスピードとコンビネーションにまさる東軍が、前半で大差をつけ3連勝。対戦成績は東軍10勝、西軍7勝となった。

東軍の3連勝は2回目。

東軍 27（18－5 9－12）17 西軍

○……全国大会の戦績などから推して、東軍の強力な攻撃に西軍がどこまで食いさがるかが興味とみられたが、立ちあがりから東軍のスピーディなコンビネーションプレーが爆発、守ってもGK竹下（中大、世界選手権代表）の堅守を軸に西軍をおさえ一方的な経過をたどって前半14分には9－1と差が開いてしまった。

○……西軍は、長身・飯田（同大世界選手権代表）のシュート力を活かそうとしたが、東軍木野、北村（立大、世界選手権代表）、正本（法大）らの出足のよいつぶしにあって実らず、逆に速攻をかけられて失点を重ねた。東軍の攻撃はさすがに多彩で、ポストプレー、サイド攻撃さらに呼吸のあった〃とびこみシュート〃などを見せてスタンドを湧かせた。

○……前半で13点差という不名誉な〃大会新記録〃をつくった西軍は後半がぜん奮起、松浦、守本（同大）宮永（関大）らの活躍で連続得点、後半17分9－18まで追いあげた。

しかし東軍も、すぐに東、木野の立大コンビと黒川（中京大）のゲットで5点を加え13分23－9と突きはなし安全圏。西軍は残り10分間に6点を返したが大勢に影響はなかった。コンビネーションさえ整えばさすがに巧者を揃えた西軍だけに前半の不振が惜しまれた。

○……それにしても東軍の見せたスピード豊かな攻撃とシャープな守りの動きは、球界のトップゾーンを自負するに充分なものであった（寛和美）

【東軍】

	選手	所属	得
GK	竹下	中大	0
GK	上野	東教大	0
FP	木野	立大	7
FP	北井	立大	2
FP	加藤	名大	2
FP	正本	法大	0
FP	野田	立大	2
FP	平岡	東教大	2
FP	北村	立大	5
FP	大宮	日体大	0
FP	黒川	中京大	1
FP	橋本	富山大	0
FP	東	立大	6
		（2）	27

【西軍】

得	選手	所属	
0	平松	関大	GK
0	藤本	大阪南大	GK
4	飯田	同志社大	FP
3	守本	同志社大	FP
1	佐藤	同志社大	FP
0	多賀谷	関大	FP
2	松浦	同志社大	FP
4	宮永	関大	FP
2	加古	関大	FP
0	久光	甲南大	FP
0	西野	関学	FP
0	坂田	西南学院大	FP
0	綾部	西南学院大	FP
0	馬着	関大	FP
1	西浦	岡山大	FP
17		（2）	

（主審・奥村＝東教大出）

7MT

5強時代の開幕告げるか（一般女子）

国体組合せ　熱戦期待の高校男女

10月22日から埼玉県浦和市で開かれる第22回国体ハンドボール競技の組み合せ抽せんは9月22日東京・日本ハンドボール協会室で行われ別表のように決まった。

今年は各地予選で波乱が相つぎ名門函館サンダー倶（北海道）が敗れたほか、本田技研（三重）宗形製作所（大阪）桜丘会（愛知）、菊松会（広島）らも姿を見せていない。

一般男子は全日本総合優勝の大崎電気（埼玉）が7連勝を狙い、今年も最有力。埼玉としては5連勝になるわけだが地元でもありいっそう負けられない。対抗は三景（東京）、常盤工業（岐阜）、住友化学（愛媛）、三菱レ大竹（広島）の実業団勢に全神奈川、中京ク（愛知）氷見ク（富山）あたりか。

一般女子は5部門中というより、今季国体全競技のなかでも屈指の〝内容〟を誇る。

トッププレイヤーによって編成された全日本総合優勝の田村紡（三重）をはじめ、同2位の大崎電気（埼玉）、同3位の大洋デパート（熊本）、愛知紡（愛知）が今回も揃い、しかも各パートに分散した。順当に行けば田村紡—大崎の決勝となろうが、西ドイツを破って意気あがる三菱鉛筆（神奈川）、東海選手権で3年ぶりに田村紡を破った愛知紡の挑戦はあなどれない。夏までは3強がこれら二チームにわずかな差をつけていると見られたが、今大会では文字通り伯仲。〝5強時代〟という豪華なキャッチフレーズが名実ともになりそうである。ダークホースは全秋田和洋（秋田）だ。

高校男女はともに夏の優勝校明星（男・東京）、花巻南（女・岩手）の二冠成るかが焦点。男子では桜台（愛知）の巻き返しがみもの。この両校を氷見（富山）、新居浜工（愛媛）が追う。惑星は地元・朝霞（埼玉）。女子の対抗は山陽女（広島）、明徳商（京都）、室蘭商（北海道）だが、室蘭商の雪じょくを狙う斗志が期待される。

教員は大阪イーグルスの連勝が固そうだが、地元埼玉と岐阜の実力も高い（編集部）

一般男子

大崎電気（埼玉）
東北学院ＯＢ会（宮城）
清商ク（静岡）
原子力研（茨城）
高松一高ＯＢ（香川）
ドンキーズ（熊本）
三国丘ク（大阪）
三景（東京）
富士レジン（兵庫）
カスカワ・ク（山形）
金商ク（石川）
室蘭ク（北海道）
三菱レ大竹（広島）
ＡＯＫ（栃木）
常盤工業（岐阜）
氷見ク（富山）
全神奈川（神奈川）
滋賀ウルフス（滋賀）
中京ク（愛知）
葵ク（京都）
鏑川ク（群馬）
大分ク（大分）
秋田市農協（秋田）
塩山ク（山梨）
北農ク（長野）
岡野愛球会（福岡）
青商ク（青森）
徳山ク（山口）
奈良ク（奈良）
住友化学菊本（愛媛）

一般女子

田村紡（三重）
室蘭ク（北海道）
三菱鉛筆（神奈川）
高岡女ＯＧ（富山）
井原高ＯＧ（岡山）
愛知紡（愛知）
大洋デパート（熊本）
全和洋（秋田）
東京重機（東京）
全大阪（大阪）
愛媛ク（愛媛）
大崎電気（埼玉）

高校男子

明星（東京）
岩国工（山口）
大石田（山形）
朝霞（埼玉）
佐野工（大阪）
桜台（愛知）
大分商（大分）
新居浜工（愛媛）
函館工（北海道）
氷見（富山）

高校女子

花巻南（岩手）
熊本市立（熊本）
名女商（愛知）
深谷女（埼玉）
山陽女（広島）
新居浜商（愛媛）
小禄（沖縄）
明徳商（京都）
栃木女（栃木）
高岡女（富山）
室蘭商（北海道）

教員

大阪イーグルス
福井
桜友会（東京）
福岡
岩手
岐阜
山口
香川
日体室蘭教員（北海道）
埼玉

国体ブロック予選決勝記録

第22回国民体育大会ハンドボール競技の予選は各県大会、各ブロック大会と二つの関門で行われた。（太字は国体出場チーム）

▽……北海道

▽高校男子
函館工 10―9 函館中部

▽高校女子
室蘭商 14―3 室蘭東

▽一般男子
室蘭ク 23―9 函館サンダー・ク

▽一般女子
室蘭ク 10―8 函館ク

▽教員
日体室蘭教員ク 23―16 函館教員ク

▽……東北

▽高校男子 大石田（山形）

▽高校女子 花巻南（岩手）

▽一般男子は 東北学院大OB会（宮城）、カスカワ・ク（山形）、青商ク（青森）、秋田農業共済組合（秋田）

▽一般女子 全秋田和洋（秋田）

▽教員 岩手教員ク（岩手）

▽……関東

▽高校男子
明星（東京） 27―13 足利工（群馬）

▽高校女子
栃木女（栃木） 13―3 昭和学院（千葉）

▽一般男子は予選ラウンド2組を行って三景（東京）全神奈川（神奈川）塩山ク（山梨）鏑川ク（群馬）を決定。第5代表決定戦でA・O・K（栃木）を、第6代表決定戦で原子力研究所（茨城）を決定。

▽一般女子は予選ラウンド2組を行ってA組1位三菱鉛筆（神奈川）B組1位東京重機（東京）に決定

▽教員
桜友会（東京） 28―17 茨城教員

▽……北信越

▽高校男子
氷見（富山） 14―5 柏崎工（新潟）

▽高校女子
高岡女（富山） 9―2 柏崎常盤（新潟）

▽一般男子第1、第2代表決定戦
金沢商ク（石川） 15―13 北陸電力（福井）
氷見ク（富山） 20―15 北農ク（長野）

▽同第3代表決定戦
北農ク 20―18 北陸電力

▽一般女子
高岡女OG（富山） 5―4 全福井（福井）

▽教員
福井教員 17―13 長野教員

▽……東海

▽高校男子
桜台（愛知） 16―11 清水商（静岡）

▽高校女子
名女商（愛知） 14―6 吉原（静岡）

▽一般男子第1、第2代表決定戦
中京ク（愛知） 19―16 常盤工業（岐阜）
清商ク（静岡） 16―14 本田技研（三重）

▽同第3代表決定戦
常盤工業 14―13 本田技研

▽一般女子代表決定リーグ順位①愛知紡（愛知）3戦全勝②田村紡（三重）2勝1敗③静岡城北ク（静岡）④全大垣（岐阜）

▽教員
岐阜教員 14―10 愛知教員

▽……近畿

▽高校男子
佐野工（大阪） 14―12 洛星（京都）

▽高校女子
明徳商（京都） 13―4 貴和（和歌山）

▽一般男子は第1予選（第1～第3代表決定戦）で三国丘ク（大阪）富士レジン（兵庫）、葵ク（京都）をまず決定。敗者復活戦（第4、第5代表決定戦）で奈良ク（奈良）、滋賀ウルフス（滋賀）を決定。

▽一般女子
全大阪（大阪） 30―5 和商ク（和歌山）

▽教員
大阪イーグルス（大阪） 52―13 京都教職員（京都）

▽……中国

▽高校男子
岩国工（山口） 15―8 矢掛（岡山）

（注）全日本高校準優勝校・広（広島）は準決勝で岩国工に敗れた。

▽高校女子
山陽女（広島） 17―6 真備（岡山）

▽一般男子第1、第2代表決定戦
三菱レ大竹（広島） 20―16 全天城（岡山）
徳山ク（山口） 32―7 かしの葉ク（鳥取）

▽一般女子代表決定リーグ順位①井原高OG（岡山）2戦全勝②徳山ク（山口）・山陽女高ク（広島）

▽教員代表決定リーグ順位①山口県教員団2戦全勝②岡山教員③広島教員

▽……四国

▽高校男子
新居浜工（愛媛） 15―12 坂出工（香川）

▽高校女子
新居浜商（愛媛） 13―7 高知西（高知）

▽一般男子代表決定リーグ
住友化学（愛媛） 36―16 高知ク（高知）
高松一高OB（香川） 32―14 高知ク
住友化学 34―21 高松一OB

【順位】①住友化学菊本②高松一高OB③高知ク（高知）

▽一般女子代表決定リーグ順位①愛媛ク（愛媛）1勝1分28得点②高知ク（高知）1勝1分26得点③三本松OG（香川）

▽教員代表決定リーグ順位①香川教員2勝②愛媛教員③中村教員ク

▽……九州

▽高校男子
大分商（大分） 19―14 鹿児島工（鹿児島）

▽高校女子
熊本市立（熊本） 11―7 大分東（大分）

▽一般男子第1、第2代表決定戦
ドンキーズ（熊本） 25―13 佐世保ク（長崎）
岡野愛球会（福岡） 28―22 大分ク（大分）

▽同第3代表決定戦
大分ク 24―17 佐世保ク

▽一般女子
エントリーが大洋デパート（熊本）一チームのため代表に認定

▽教員
福岡教員 11―10 熊本教員

▽……埼玉県（開催地）

▽高校男子は代表決定リーグで朝霞に決定

▽高校女子は代表決定リーグで深谷女に決定

▽一般男子と一般女子は大崎電気を代表に認定

▽教員は埼玉教員を代表に認定

各地の記録

愛知紡、田村紡を破る

関東選手権は男女とも大崎

第14回関東選手権は9月8日から3日間茨城県・水海道一高球技場に関東8都県の一般男女代表が参加して行われた。

男子では全日本チャンピオン大崎電気（埼玉）に対して全神奈川が善戦、終了10分前まで14－11とリード、そのまま押し切るかに見えたが、大崎はそのあと連続6得点し逆転をとげて逃げ切り、8年連続8回目の優勝を飾った。

女子は予想通り大崎電気（埼玉）－三菱鉛筆（神奈川）の実業団同士が優勝を争ったすえ、大崎電気が地力勝し、4年連続4回目の栄冠を得た。

▼男子予選ラウンドA組1回戦

三景（東京） 27（15－5、12－1）6 佐原ク（千葉）

塩山ク（山梨） 15（8－4、7－7）11 AOK（栃木）

▽同勝者戦

三景 18（6－7、12－9）16 塩山ク

▽同B組リーグ

全神奈川（神奈川） 26（13－6、13－2）8 原子力研究所（茨城）

全神奈川 31（16－5、15－5）10 鏑川ク（群馬）

鏑川ク 17（8－7、9－6）13 原子力研究所

▽同決勝トーナメント1回戦（＝準決勝）

全神奈川 17（10－5、7－4）9 三景

大崎電気（埼玉）シード

▽決勝戦

大崎電気 19（8－7、11－9）16 全神奈川

▼女子予選ラウンドA組1回戦

全茨城（茨城） 13（8－1、5－2）3 佐原ク（千葉）

三菱鉛筆（神奈川） 25（12－1、13－0）1 日川ク（山梨）

▽同勝者戦

三菱鉛筆 17（12－0、5－2）2 全茨城

▽同B組リーグ

全群馬（群馬） 14（6－1、8－2）3 栃木ク（栃木）

東京重機（東京） 25（8－2、7－2）4 全群馬

東京重機 12（8－2、4－1）3 栃木ク

▽同決勝トーナメント1回戦（＝準決勝）

三菱鉛筆 10（6－2、4 1 3）3 東京重機

大崎電気（埼玉）シード

▽決勝戦

大崎電気 9（6－2、3－1）3 三菱鉛筆

中京クに初の栄冠

第19回東海選手権は9月9、10の2日間静岡県清水市に東海4県の予選勝者が集り行われた。

その結果、男子は新進中京ク（愛知）が巧い試合運びで初優勝した。女子はリーグ戦で争われたが復調愛知紡（愛知）が全日本総合1位の田村紡（三重）を破って4年ぶり7回目の優勝を飾った。愛知紡が田村紡に勝ったのは昭和39年8月の全日本総合以来でこの間に13連敗（1引分）していた。

▼男子準決勝（1回戦）

中京ク（愛知） 19（10－10、5－5、1－1、3－0）16 常盤工業（岐阜）

清商ク（静岡） 16（8－4、8－10）14 本田技研（三重）

▽同3位決定戦

常盤工業（岐阜） 14（8－5、6－8）13 本田技研（三重）

▽同決勝

中京ク 18（12－5、6－11）16 清商ク

▼女子リーグ

愛知紡（愛知） 10－3 静岡城北ク（静岡）

田村紡（三重） 23－2 全大垣（岐阜）

愛知紡 16－4 全大垣

田村紡 15－2 静岡城北ク

静岡城北ク 7－3 全大垣

愛知紡 18－10 田村紡

【順位】①愛知紡3戦全勝②田村紡2勝1敗③静岡城北ク1勝2敗④全大垣3敗

埼玉、高男・教員で勝つ

▼群馬・埼玉・茨城3県対抗定期戦（8月・笠間高）

▽高校男子の部

茨城（麻生） 11（5－6、6－3）9 群馬（前橋商）

茨城 23（6－4、17－5）9 埼玉（浦和市立）

埼玉 17（9－7、8－7）14 群馬

▽同女子の部

茨城（水海道二） 10（6－2、4－3）5 群馬（前橋市女）

埼玉（深谷女） 8（2－2、6－2）4 群馬

茨城 10（4－2、6－2）4 埼玉

▽教職員の部

埼玉教員 28（16－4、12－6）10 茨城教員

埼玉教員 28（13－6、15－6）12 群馬教員

茨城教員 24（13－10、11－5）15 群馬教員

桜丘会、1敗で優勝

▼第3回愛知クラブ対抗リーグ（7月・名古屋金山体育館）＝男子のみ

▽1部

東杏会 16－12 名大ク

愛工ク 21－13 東山ク

東杏会 18―15 桜丘会
東山ク 18―16 名大ク
桜丘会 20―18 愛工ク
東杏会 26―10 東山ク
愛工ク 21―20 名大ク
桜丘会 23―13 東山ク
桜丘会 39―17 名大ク
愛工ク 22―17 東杏会

【順位】①桜丘会3勝1敗（得点率〇・五九）②東杏会3勝1敗（〇・五六）③愛工ク3勝1敗（〇・五三）④東山ク1勝3敗⑤名大4敗

【2部順位】①向陽ク4戦全勝②愛商ク③学連ク④松陰ク⑤名古屋高等無線

▽1・2部入れ替え戦
向陽ク（二部） 17―10 名大ク（一部）
向陽クが一部へ昇格

女子で小諸勢強し

▼第16回長野県総合体育大会ハンドボール競技（8月・上田）

▽一般男子準決勝
北農ク 21―3 坂城ク
上田ク 17―11 鳩ケ丘ク

△同決勝
北農ク 24（12―5、12―8）13 上田ク

▽同女子決勝
小諸商ク 12（5―2、7―6）8 ほていや

▽高校男子決勝
上田 15（6―1、9―3）4 坂城

▽同女子決勝
小諸商 14（5―3、9―1）4 上田城南

[ブロック高校選手権]

第14回東海高校

第14回東海高校選手権は9月9、10の2日間静岡県清水市に東海4県から男女それぞれ2校づつの16校が集り開かれた。

男子は桜台（愛知）が3試合で64点をあげる安定した攻撃力で4年連続11回目の優勝を、女子は名女商（愛知）が決勝で同門の高蔵女商（愛知）に逆転勝ちして初優勝した。愛知の男女制はは5年ぶり8回目。

▽男子1回戦
桜台（愛知） 21―6 岐山（岐阜）
清水商（静岡） 22―12 高田（三重）
天竜林業（静岡） 23―15 岐阜南（岐阜）
名城大附（愛知） 35―6 津工（三重）

▽同決勝
桜台 16（10―6、6―5）11 清水商
天竜林業 20（8―5、12―10）15 名城大附

▽同決勝
桜台 27（15―6、12―8）14 天竜林業

▽女子1回戦
名女商（愛知） 12―7 四日市（三重）
吉原（静岡） 8―1 大垣南（岐阜）
高山（岐阜） 5―4 津女（三重）
高蔵女商（愛知） 7―2 清水女（静岡）

▽同準決勝
名女商 14（7―3、7―3）6 吉原
高蔵女商 10（6―2、4―1）3 高山

▽同決勝
名女商 6（1―2、5―2）4 高蔵女商

「各地の記録」欄への寄稿を歓迎いたします

少年成年の男女4級に

国体の規模縮小案

体協・国体常任委員会はかねてから国体の規模縮少と参加対象の再検討について、同委員会内に国体開催基準要項改正小委員会を設けて研究をすすめて来たがこのほどその中間報告原案がまとまり、8月22日の同委で承認した。

それによると、基本構想として秋季国体は参加全競技とも選手層を少年男女（19才未満）と成年男女（19才以上）の4クラスに分けこれまでの高校男女、一般男女、教員、青年の種別をやめる。

しかも4クラスのうち1クラス（例・少年男子）を46都道府県代表の参加を認めた場合は、他の3クラス（少年女子、成年男女）は原則として10～23のブロックにしぼって参加を認めることにするという。

どのクラスを46都道府県参加とするかは各競技団体の意思による。

また秋季大会の競技のうち夏季大会に移行する競技についても検討が加えられている。

国体の規模縮少はこれまでも再三いわれて来たが、同委ではこの原案が通れば、昭和44年の長崎国体から実施したい意向のようだ。

打田町（和歌山）など予定

46年以後の国体

本誌既報のとおり、昭和46年（第26回）以後49年までの同体開催地が国体委員会で決められたが、委員会に提出された資料による各年度のハンドボール競技開催予定地は次のとおりである。

▽昭和46年 和歌山県打田町（那賀高、打田中）▽47年 鹿児島県隼人町（鹿児島工専）▽48年 千葉県（佐原高、佐原中）▽49年 茨城県水海道市（水海道二高、水海道中）

NHKで「ハンドボール」教室

NHKでは10月1日、8日の「テレビスポーツ教室」（教育テレビ）でハンドボールをとりあげる。指導は日本協会技術委員・明星高監督高橋英次氏。実技は今年度全日本高校選手権チーム明星高部員。

海外トピックス

★……境井秀二

近着のIHF公報などから最近の外国球界の動向を探ってみよう。

イタリア球界が発足

ヨーロッパ諸国のあいだでハンドボールはもっとも盛んな人気のあるスポーツの一つだが、どうしたわけか、これまでイタリアではほとんど親しまれていなかった。

しかし昨年西ドイツ選抜がイタリアを訪れミラノとヴェローナで模範試合を行ったのを機にイタリアハンドボール協会が創立され、このほどローマのスポーツパレスにヨーロッパのトップチーム4チームが招かれて国際大会が開かれ成果をあげた。

参加したのはパルチザン・ブヂエロバール（ユーゴ1位）、バニク・カルビナ（チエコ2位）、PUC・パリ（フランス1位）、アイントラヒト・ワイズバーデン（西ドイツ）の各クラブで2日間にわたり高いレベルの好試合が展開され、千五百人の観衆にハンドボールの面白さを伝えた。

活気示すカナダ

このほどカナダを訪れたIHF競技委員ジーグフリード・ペライ氏（西ドイツの著名コーチ）はカナダ・ハンドボール界の近況を次のように伝えている。

モントリオール市には八百人のジュニア選手と、二百の大学、専門学校チーム約一万五千人の選手がおり、活発な動きをみせている。最近の大会ではジュニア36チーム、女子7チームが参加し、その普及ぶりはすばらしいものである。次の世界選手権（男子）、ミュンヘンオリンピックへの出場もかなり具体的に検討されている。

カナダ球界が短時日にこれほど成長したのはウド・テタン会長とケベックに住むハンガリー人アンデイ・メゼッツ氏のたゆまざる努力におうところが大きい。

クンスト氏が辞任

日本におなじみのルーマニア・ナショナルチームの名監督イオン・クンスト氏は今年一月の第6回世界男子七人制選手権大会を機にその職を辞めた。

後任はネデフ、トロフインの両氏。

ソ連女子ハンガリー破る

進境いちぢるしいソビエト女子チームは最近の国際試合で世界チャンピオンチーム・ハンガリーとの2試合に11―8、14―7で連勝した。ちなみに来年11月の世界女子7人制選手権はモスクワで開かれる。

世界学生、今年も不出場か

第4回世界学生選手権は来年（昭43）1月4日から9日間西ドイツのドルトムントで開かれるが、このほど主管団体から、日本体育協会を経て本部協会に日本チームに参加の意向があるかどうか問い合わせて来た。

常務理事会ではこの問題を全日本学連に一任、全日本学連では非公式に各役員から意見を求めたが、遠征費全額個人負担という点に問題があるとして積極的に参加を主張する声は出なかった。同大会へ日本は第1回に全日本学生選抜を送っているが、その後は不出場。今回も見送りの公算が強い。

安藤全日本学連理事長の話・参加はしたいが総額一千万をこす経費が全額個人負担というのでは二の足を踏む。

単独チームとして出場の希望があれば、改めて考えるがこれも時期的に難しいのではないか。

次の大会（昭45＝予定）から出るかどうかはまだわからない。

学連選出理事に久保氏

全日本学生連盟では欠員中の日本協会派遣理事に久保義雄氏（同志社大OB）を決めた。

香川県協会住所変更

香川協会はこのほど
高松市四番町八番地
高松工芸高校内　電話高松（五一）四一四四に移った。

新刊紹介

◇図解コーチ ハンドボール　高橋健夫著

久々の技術書。個条書きふうな解説はハンディな内容を狙った著者の意図であろうがよく活きている。

書中、著者は「スポーツはあくまで実戦であり、理論的にいくら精通していてもそれは実力ということにならない。

つねに理論的裏付けのあるプレーを展開できるよう努力していただきたい」と説いているが、全篇にその精神が貫かれ、特に総合プレー（チームプレー）篇は〝図解コーチ〟の標題にふさわしい。

これからのハンドボールは総合プレーの巧拙が大きなポイントになってくるといわれている時だけに大いに参考となろう。

著者・高橋健夫氏は日本協会普及委員、東京教大OB。（成美堂書店発行、A6判一六四頁、二〇〇円）

編集後記

○…待望の西ドイツが来日。その前半戦の模様を今月号は集めた。

記者クラブのかたがたに全面的な御協力をお願いした。これまでの試合評よりも、かなり多彩になったものと思う。次号〆切は10月5日。読者からの日独関係の投稿も大いに歓迎したい。

○…西ドイツの歓迎会席上で球界の大先輩松本良三先生にお目にかかれた。協会創始期の正確な資料や当時のお話を本誌に近くしていただくことにした。

日独戦の盛況を見ながら古い時代の労苦の特集を是非しなければいけないねと藤本君と話しあったばかりだっただけに松本先生にお会い出来たのはうれしかった。

○…「ハンドボール球史」が前号完結したあとでもなおいろいろの御協力が寄せられるのはありがたい。不明のまま書き終った第2回全日本女子の優勝メンバーを松本重雄氏が探してくださっているし、馬場副会長も古いスクラップで「なにか見つけてあげよう」という。

○…ブロック選出編集委員として新たに氏原亨（東海）氏が加った。ブロック編集委員の活動も今秋からいよいよ軌道にのせることが出来そうだ。（S）

ハイ-ユニ

黒く・濃く・きれいに書ける理想のシン

そのヒミツは
理想の粒度配合

日本ハンドボール協会編
ハンドボール 第四十七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 昭和四十二年九月二十五日印刷 昭和四十二年十月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五 電話大代表(467)三一一一 振替東京五八三四八番
編集兼発行人 鈴木達雄
定価百五十円